
眼鏡の奥の瞳に眠る真実

風月加保留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眼鏡の奥の瞳に眠る真実

【Nコード】

N14490

【作者名】

風月加保留

【あらすじ】

1ヶ月前から、行方不明になったコナンが腹部に銃を撃たれた状態で発見された。幸い一命を取り留めた。毛利小五郎は、コナンの非常事態にいない両親を捜すことにした。捜し始めて3日が経ち、自分の力では搜索が無理だと悟り目暮警部に搜索を依頼した。それから、2日後目暮警部は驚くべきことを小五郎と蘭に伝えた——
「コナン君に戸籍がない」

プロローグ（前書き）

蘭視点です。

プロローグ

コナン君が急にいなくなつて一ヶ月が経っていた。私は、新一のかわりとして見ていたコナン君がいなくなつて寂しかった。最近、新一からも電話がない。

二週間前に、服部君がコナン君に会いに事務所に来た。

「坊主はどこにおる？」

「コナン君なら、二週間前から姿が見えないのよ」

「まさか、あいつ……」

服部君は、心当たりがあるようですぐに事務所を飛び出した。そのあと、服部君も一週間ほど和葉ちゃんの前から姿を消した。

だけど、一週間前に服部君は右足を捻挫しながら帰ってきた。そのことは、和葉ちゃんの電話で知った。そのあと、服部君は私に電話を掛けてきた。

「坊主はおるか？」

「まだ、帰ってきてない」

「なあ。姉ちゃん。もしかしたら、坊主は帰ってこれへんかもしれない」

「どうして？」

「……それは、言えへん」

服部君はすぐに電話を切った。それから、服部君は電話も掛けても何も答えてくれなかった。

今日も服部君に電話を掛ける。コナン君のことを知っている人は、今は服部君だけだったから。

私が電話を掛けようとしたとき、事務所の扉が開いた。

「ら、蘭。大変だ。コナンが…」

「コナン君がどうしたの！」

「コナンが何者かに拳銃で撃たれて、今…米花総合病院で緊急手術中だ。一命を取り留めることかわからない状態だ！」

お父さんは、一応コナン君を捜していたようだ。いくらコナン君が居候の身だとしても、お父さんはちゃんと保護者をしていた。いつの間にか、お父さんはコナン君を“息子”として見ていた。私もコナン君を“弟”として見ていた。

私はすぐに米花総合病院に向かった。緊急手術室の扉の前にある椅子に、哀ちゃんと服部君が座っていた。二人は何か気まずい雰囲気を持っていた。

「哀ちゃん。服部君。コナン君の容態は？」

「まだわからないわ」

「ねえ。何で、コナン君は拳銃で撃たれたの？」

「…すまん。姉ちゃん」

服部君はすまそうな顔してそれだけ答えてから、何も言わなかった。

二時間は経ったと思う。緊急治療室の治療中と書いているランプが消えた。私はすぐに緊急治療室に扉の前に向かった。中から、先生が出てきた。

「先生。コナン君の容態は？」

「一命を取り留めました」

プロローグ（後書き）

どうも山田花子です。

花子と読んでくださいね。

コナン「とりあえず、俺は一命を取り留めたみてえーだな」

花子「死なせるわけにいかないの」

コナン「このあと、どうなるんだ？」

花子「極秘です」

コナン「教えろよ」

花子「黙ってくださいね」

それでは続きます。 評価お願いします。

第一話 壊滅（前書き）

小五郎視点です。

第一話 壊滅

蘭はコナンの看病をしていた。コナンが目が覚めるまで、学校を休むつもりだったらしいが俺は蘭に言った。

「蘭。お前は、学校行つてろ。俺が、看護してやるから」

俺はそういつとコナンが寝ているベッドの横の椅子に座った。蘭は、気持ちが半分ここにいるまま学校に登校したはずだ。

「なあ… コナン。お前はどんな隠しごとを持ってるんだ。どんなことを今、思っているんだ。お前は何者なんだ。赤の他人であるはずの蘭を必死に守るのはどうしてなんだ？ お前はまだ、小学生なのに何か得体の知れないものを背負うものが重すぎないか？ どうして、両親と会えないことを寂しがらないんだ？」

俺はずつと疑問に思っていたことをコナンに向かって話した。今、コナンが起きていたとしても答えが返ってくるはずのない質問だと思っけどな。そのあと俺は、下の売店で新聞を買った。

コナンが入院している部屋で、新聞を読んだ。俺はその新聞の三頁の片隅に気になる記事を発見した。

《ある大きな組織壊滅

ある大きな組織がFBIとある少年によって壊滅させられた。なお、FBIはその少年について何も言わない。噂だが、その少年は拳銃で撃たれたという情報がある…》

「まさか…この少年は、コナンじゃないのか？」

俺はそんな不安を抱いた。

コナンが撃たれたことを知ったのは、目暮警部からの一通だった。

「コナン君が、何者かに拳銃で撃たれて、今。米花総合病院に運ばれて治療中だ！」

急いで事務所に帰り、蘭と一緒に米花総合病院に向かった。一命を取り留めた。俺は安心した。

コナンのことは、最初俺は無駄なお荷物だと思っていた。けど次第に、コナンを本当の息子と思うようになった。蘭も本当の弟のように思っている。

だから、コナンのことは大切な息子だ。死んでは困るのだ。家族が減っては困るのだ。

でも、俺はコナンのことは何も知らない。前に住んでいた場所や学校・友達。俺が知ってるのは、あの探偵の坊主の遠い親せきというくらいだ。

コナンは妙に頭が切れる。とても小学一年生だと思えない。両親と離れて暮らしているから、大人っぽく振舞っていると俺は考えている。

そういえば、コナンの両親はどこにいるんだ。コナンが非常事態というのに、連絡も来ない。

「コナン。お前の両親はどこにいるんだ？ 捜してやるよ。看病してやりたいのはやまやまだが両親に会いたいだろ？」

俺はそうコナンに言うとともに病室から出て行った。コナンの両親を捜すことにしよう。コナンは今、とても辛い状況下に置かれている。この時に一緒にいないといけないのは両親。なのに、両親は来ない。

知らないのかもしれない。コナンが拳銃で撃たれたことを。俺が

伝えてやるよ。コナンが拳銃で撃たれたことを。

第一話 壊滅（後書き）

駄文ですみませんね。それと、感想ありがとうございます！

コナン「これで、書かれる俺たちの気持ちにも少し考えてくれよ」
灰原哀「そうね。こんな駄文だと、アポトキシン4869を飲みましてあげるわ」

山田花子「……」

それでは、次回もお楽しみに！

第二話 限界（前書き）

小五郎視点です。

第二話 限界

コナンの両親を探し始めてから、三日が経った。俺は、捜すのに力の限界を感じ始めていた。コナンはまだ眼を覚まさない。

今、俺はコナンが入院している部屋にいる。後で、目暮警部に会いコナンの両親を探してもらうように頼むことにした。

「コナン…いい加減、目を醒めせ！ 蘭が待っているぞ」

「……らん……」

「へっ？」

「に……げ……ろ……蘭！」

コナンはそういいながら起き上った。コナンは辺りをキョロキョロして俺を見て状況を理解したらしい。

「おっちゃん。僕は生きてるみたいだね」

「蘭」と叫んだ声とは違い、可愛い声で言葉を発した。

「そうだよ。前の時とは違い、予備用の血液があつたからな。それにしても…どうして、コナンは拳銃で撃たれたんだ」

「…それは…」

コナンは俯きながら呟く。何か、言えない事情でもあると感じた。でも、俺は保護者として黙っているわけにはいかない。生死の中を彷徨ってまで言えない事情かもしれないが、この何ヶ月間コナンの世話をした俺は知る権利はあるはずだ。

「その顔は知っているんだな？」

「……」

「なんで保護者の俺に教えてくれないんだ？」

「……」

「どうして、死ぬ思いもしたのに教えてくれないんだよ！」

「……」

「それに、この一ヶ月間どこに行ってたんだよ？ 戻って来たと思ったら、お前は生死の世界を彷徨っているのにさ！」

コナンは俺の顔を真剣な目つきで見た。

というより、見た気がした。

「…一ヶ月間ね。お母さんたちと一緒にいたんだ」

やっと答えた。でも、これは嘘だ。それに、拳銃で撃たれた理由を話さない。いや、一生話すつもりはないとコナンは決めていると思った。

気まずい雰囲気になっていた。その雰囲気を打ち破ったのは、目暮警部だった。

「毛利君。一体、頼みたいことは何かね？」

「実はですね。コナンの両親を探して欲しいんですよ。私の力ではどうにもこうにも手付かずで…」

俺はちらつとコナンの様子をつかがった。焦った表情をしていた。

「コナンは、両親がどこにいるかも知らないんでして…」

「そうなのか？ コナン君」

「う…うん。僕のお父さんとお母さん、どこにいるかわからないんだ」

「それで、寂しくないのか？」

「…寂しくないよ。おっちゃんと蘭姉ちゃんがいるから」

「でも、両親がコナンの非常事態にいないのはおかしいので…目暮警部。よろしく頼みましたよ」

「まかせたよ。毛利君」

目暮警部は用件はそれだけ済むと病室から出て行った。俺は、コナンの顔を見た。

焦ったような困ったような表情をして、俺を見ていた。

どうしてだ、コナン。なんでそんな焦った顔をするんだ。

それに、目覚めかけた時に「蘭。逃げる蘭」と、子どもっぽくない声色で言ったのはどうしてだ。

いずれにしろコナンには聞きたいことばかりだ。唯、コナンは聞きたいことの返事は帰ってこないはずだ。隠し続けるはずだ。今までもそうだったように、これからも。

「あれ…おじさん、僕の眼鏡は？」

唐突に聞いてきた。確かにコナンは眼鏡を掛けてなかった。俺は、小さなタンスからコナンの眼鏡を取り出した。その時、俺はあることに気がついた。

この眼鏡には度が入っていないことに。

俺は、コナンの顔を見た。眼鏡を掛けてないコナンの顔は、蘭をたぶらかしている探偵坊主・工藤新一の幼少期にそっくりだった。あの探偵坊主の親戚とはいえ、ここまでそっくりだと疑いたくなる。

「ねえ。おっちゃん、眼鏡返してよ」

「なあ…お前…」

「へっ？」

「工藤新一なのか？」

「えっ！」

コナンの顔が一瞬、硬直したように見えたが子どもの笑顔で言い返してきた。

「や、やだな。僕、子供だよ。新一兄ちゃんのわけないじゃない」
「なら、どうして眼鏡には度が入ってないんだ？」

「え、えつとね。一年前までは度が入ってたんだよ。だけど、目がよくなつて眼鏡をしなくなっただけで、僕ね眼鏡かけないと落ち着かなかったから伊達眼鏡を掛けているんだよ」

「ふん」

「それに、新一兄ちゃんは高校生だよ。僕は小学生。高校生が小学生になれるわけじゃない？」

コナンの言い分は確かに合っている。高校生が小学生になれるわけない。

ドラマじゃあるまいし、小さくなれるわけない。

「だからさ…眼鏡返してくれない？」

「あ…ああ」

コナンは眼鏡を掛けて、安心した顔で小さなため息をついた。

「でも、どうしておっちゃんは僕を新一兄ちゃんだと思ったの？」

「ええ…とそれは、あの探偵坊主の小さい時にお前が似ているから」

だよ」

似ていても、コナンは子どもだ。あの探偵坊主とは違う。コナンの方が優しいし、蘭を幸せに出来そう奴だからだ。

「俺の勘違いだった。すまん…お前なら、蘭と結婚してもいいと最近思ってたな。あの探偵坊主は、蘭を待たせてやがって最悪だ」

「え…え？」

コナンは複雑な表情をしている。コナンが好きなのは蘭。だけど、十歳も離れているから思いが伝えられないだけなのかも知れない。

「おまえは、蘭のことは好きか？」

「えっ!？」

「凶星か？」

コナンはさらに複雑な表情をしてしまった。どうやら凶星のようだ。

「お前となら、俺は心置きなく蘭を嫁に出して上げれるような気がするんだ。でも、問題なのはあの探偵坊主だ…」

俺はぶつぶつと呟き始める。コナンは複雑な表情をしたままだった。どうして、そんな表情をするんだ。蘭のことが好きじゃないのかよ。

第二話 限界（後書き）

読んでくれてありがとうございます！！

コナン「おい！ 山田花子。おっちゃんが、誤解してるじゃねーか！」

花子「いいじゃん。そのまま、正体を隠したまま生きて、蘭ちゃんとゴールインしてさ。江戸川蘭にしちゃえば」

コナン「俺は、新一として結ばれたいんだよ！」

哀「本当に、APTX4869を飲ましてあげたい性格ね。あなたの年齢は？」

花子「13歳です……」

哀「3歳になっちゃうのね」

花子「…マジ？」

哀「ま、これを完結させられなかった飲ますことを宣告するわ」

花子「……おい」

哀「それと、私はいつ本編に出れるのかしら？」

花子「いつか」

哀「さ、工藤君。さっさと作者を時計型麻醉銃で眠らせてあげて」
コナン「わかったよ」

ぶすっ

花子「じいかああいもよおろおしいくうつね」

コナン
花子

「皆さん。ご愛読、ありがとうございます。駄文ですが……」

がばっ

花子「コナン君。私は、麻酔なんか効かないのよ！」
コナン「ゾウでも三十分は寝るんだぞ！」

それでは、次回もよろしく願いますね。

第三話 複雑（前書き）

コナン視点です。

第三話 複雑

「おまえは、蘭のことは好きか？」

「えっ!？」

「凶星か？」

確かに凶星だ。唯、俺は江戸川コナンとして好きなのではなく工藤新一として、好きなんだよ。

「お前となら、俺は心置きなく蘭を嫁に出して上げれるような気がするんだ。でも、問題なのはあの探偵坊主だ…」

コナンとして付き合いもありだと思っけど、俺は工藤新一として蘭と付き合いたい。おっちゃんは、許さないとっけど。

おっちゃんは勘違いしている。俺が、工藤新一だから蘭が好きなんだ。江戸川コナンは、工藤新一が小さくなった姿で、心は工藤新一のままなんだ。

「で…でも、おっちゃん。蘭姉ちゃんには、新一兄ちゃんがいるじゃないの?」

「工藤^{あれ}新一は、蘭のただの幼馴染であいつが彼氏面^あぶっているだけだ!」

おっちゃんの言葉は筋が通っている。

確かに俺は、蘭とは唯の幼馴染で俺が彼氏面しているだけだ。

付き合ってもいないのに、勝手に「待ってて」というのは筋違いだよな。おっちゃん、俺は確かに工藤新一は最低の奴だ。蘭を泣かせることしか出来ない、唯の幼馴染だ。

「…でも、どうして蘭姉ちゃんはただの幼馴染なのに泣きながらも待っているの？ 蘭姉ちゃんは可愛いから、違う人と付き合うことも可能なのに」

ついつい言ってしまった。

「そ…それは、きっと。蘭は…認めたくないけど、探偵坊主が好きだからなんだよ。きっと」

おっちゃんは、嫌々ながら言う。おっちゃんは、口では認めたくないとは言っているけど心の中では認めかけているはずだ。

それでも、男手一つで蘭を育てた父親で蘭の気持ちを手にとってわかるんだろうな。俺とは違い、蘭のことを大切に思っているはずだ。だから、蘭を勝手に待たせて泣かせる俺のことは、嫌いなんだろうな。

「でも、俺は探偵坊主と蘭の結婚は許せねーよ。恋人でもないの勝手に待つてろなんて、本当に勝手すぎる。蘭の幸せをちよつとは、考える！」

考えていたよ。ずっと、工藤新一は江戸川コナンとして傍にいて見守っていた。

俺は、新一として蘭の悲しみを和らげることが出来ないのかとずっと考えていた。江戸川コナンは、工藤新一だって言いたかった。でも、それは蘭の命にかかわる問題だったから喋れないでいたんだ。

「それに…何故、あいつは親戚のコナンが拳銃を撃たれたのに見舞いも来ないんだよ？」

「き、きつと事件で忙しいんだよ」

俺は嘘をついた。工藤新一はここにいて、拳銃で撃たれたんだよ。でも、そんなのは口が裂けてもあの世に行っても言えないことなんだ。黒の組織をFBIと一緒に、潰したとはいえまだ組織の残党がいるかも知れない。その可能性を踏まえて、俺は正体を明かすことにしないって決めた。灰原・服部も、その意見に賛成してくれた。

「命より事件の方が大切なんだな。あいつは」

おっちゃんは、ぼそつと呟くと病室を出て行った。

俺は、心を痛めてしまった。嘘をまた付いてしまう。

でも、それは他人を守る嘘であり決して悪い嘘ではないんだ。出来れば、そうだと思いたいんだ。

もう少しだけ、待ってくれないか。蘭。

解毒剤が出来るまで、俺は江戸川コナンを続けることになるんだ。ごめんな。蘭。

俺、我が儘でごめんな。

元の姿に戻ったら、お前に「好き」だというよ。必ず戻ってやるよ。

第三話 複雑（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

コナン「おい。山田花子。ますます、工藤新一の印象が悪くなったじゃねーか！」

花子「自業自得。恋人でもないのに、勝手に待たせる方が悪いんだよ！」

哀「今回は、花子に同意だわ。工藤君がいけないのよ。蘭さんを待たせた」

コナン「お、おい灰原まで…なんだよ」

哀「博士が読んでるので、さようなら」

哀、退場。

コナン「なあ。俺のいつなったら戻るんだ？」

花子「いずれ、もどりますよ」

コナン「いずれって…」

それでは、読んでくださってありがとうございます。
次回もお楽しみに！

第四話 心配（前書き）

蘭視点です。

第四話 心配

コナン君が眼が覚めたと聞いて、私は部活が終わりすぐに米花総合病院に園子と一緒に向かった。

病院の自動ドアで、すれ違いざまにコナン君のクラスメイトの歩美ちゃん・元太君・光彦君に会った。

「あ、蘭ねえさん。コナン君は、すごく元気でしたよ」

「そうだけ。生意気ぐらいに、元気だったぜ」

「そうだよ。蘭姉さん、コナン君はすごく元気だったよ」

「ありがとう。歩美ちゃん、元太君、光彦君」

「じゃあね」

そう言って別れると、私はコナン君がいる病室へ早足で向かった。

「コナン君!」

私は、病室のドアを開けると同時に叫んだ。

「ら、蘭姉ちゃん」

「私も、いるのよ。眼鏡のガキンチョ」

後ろから園子は、そういうとコナン君のベットの前まで足を運ぶ。私も足を運んだ。

「怪我大丈夫?」

「う、うん。大丈夫だよ」

「しかし、コナン君も災難よね。二回も拳銃で撃たれてしまうなんて」

「園子、コナン君に失礼だよ」

「…園子姉ちゃん。僕も、まさか二回も拳銃で撃たれるなんて思わなかったよ（本当は、急所じゃないところに撃たれたことは合わせれば、二桁は行くと思うけどな）」

「で、なんでコナン君は拳銃で撃たれたの？」

私は単刀直入に言った。コナン君は戸惑った表情をして俯くと呟いた。

「…それは言えないよ。“命”に関わることだから」

声のトーンが低くなっていた。私と園子は、黙るしかなかった。

私は、これはコナン君との壁に関係していると思った。

コナン君と仲良くなっても、どこか壁を作っているような気がしていた。そこから先の壁は見せてくれなかった。

「って、小学生のガキンチョが命に関わることとか気安く言うんじゃないんわよ！」

「……」

「こら、何か言いなさいよ」

園子は耐えきれなくて叫んだ。コナン君は、寂しそうな表情で私たちを見つめた。そして、俯いた。

「園子…姉ちゃん、ここ病室だよ。病院だよ。叫んじゃダメですよ」

「ガキがなめたことを言っているんじゃないよ」

「でも、園子姉ちゃん。病院は大きい声、出しちゃダメなんだよ。図書館と一緒に」

「そうよ。園子。コナン君の言う通りよ」

コナン君の表情は笑顔だった。でも、コナン君の瞳を見るとどこか寂しそうで切なそうな感情が映っていた。どうして、そんな顔をするの。コナン君。

「それより、蘭。最近、旦那から電話来るの？」

「ちよつと、園子。コナン君がいるのよ」

「その調子じゃ、来ないのね。まったく、どこほつつき歩いてんのかしら。あの推理オタクは」

コナン君の表情がちよつと、歪んだ気がした。でも、それは一瞬の出来事ですぐに笑顔に戻っていた。

「新一兄ちゃんのこと？」

「そうよ。コナン君。もし、電話掛けてきたらこう言ってあげなさい！ “蘭が悲しんでのよ。どうして、大切な時にいないのよ！それでも旦那なの？” と」

「ちよつと。園子お。旦那じゃないわよ」

そついいながら、コナン君の方をちらつと見た。呆れた表情をして、乾いた笑いをしているような感じだった。

どうして、そんな顔をするの。コナン君。

「と・に・か・く。蘭。私、先に帰るわ。新一君の代わりに、コナン君の相手もするんでしょ？」

「ちよつとお。園子お」

「じゃあね。蘭。また明日」

園子はそついうと帰って行った。コナン君と私、二人きりになった。

何、話せばいいんだろう。わからないな。

「…蘭、姉ちゃん。一ヶ月、いなくなつてごめんね。でも、一ヶ月いなくなつた理由は聞かないで。まだ、話せないんだ!」

コナン君は罪悪感が一杯詰まつた表情で私の方をまっすぐ見る。コナン君の瞳が「今は、何も聞かないでくれ頼む!」と言っているような気がした。

「わかった」

「ほ、本当に蘭姉ちゃん?」

コナン君は明るくなりかけた表情で、聞いてくる。瞳の方は「ありがとな。蘭」と言っている気がした。これも、気がしたけど。

「本当よ。だけど…」

「だけど?」

「私を、これから心配させないことを約束してくれたら聞かないよ」

コナン君は、戸惑つた表情をしていた。

「…約束するよ」

ポツリと呟いた。何かをあきらめた感じの声だった。その何かはわからないけど。

「唯でさえ、新一のことで心配しているのわかっていてでしょ?」
「うん」

コナン君は寂しい表情で頷く。どうして、そんな表情をするの。

コナン君は俯いていたから、ここからだと瞳の声が見えない。

やっぱり心配だ。

いつか、コナン君がいなくなることを。新一みたいに消えたりすること。

「ねえ、コナン君は急に消えたりしないよね？　新一みたいに！？」

コナン君は、俯いたまま何も言わない。私は返事を待つことに決めた。

「…わからないよ。消えないとはっきりと断言出来ないよ」

「嘘…」

「ごめんね。蘭姉ちゃん」

コナン君は、ものすごく寂しげな表情で私を見た。

第四話 心配（後書き）

本当に駄文ですみません。感想ありがとうございます。
読んでくれてありがとうございます。

コナン「おい。どうして、こんなに更新が遅れたんだ？」

花子「…色々とありまして」

コナン「その色々は何だよ？ 駄文で許されてもらっているんだから言えよ」

花子「…クライマックスで西武が負けたことにショックを受けて…」

コナン「くだらねー」

哀「あら。工藤君、あなたも四年前のドーハの時に一週間は眠れなかったことと一緒にじゃない」

コナン・花子「…それとこれは別！」

哀「息ピツタリね。あなたたち、兄妹か何か？」

コナン「兄妹じゃねーよ」

哀「それより、私はいつになったら活躍するのかしら。プロローグで“まだわからないわ”と言ったきりだもの」

コナン「それより、戸籍は…」

花子「次回次回。たぶん」

コナン「おい。まさか戸籍の話、どうするか考えてねーのか？」

花子「考え居るわよ。しっかりと、考えたわよ。更新できない間」

それでは次回が戸籍の話の序盤？みたいな感じになったりするかも知れません。

次回も駄文だと思うけど、よろしく願いします。

第五話 驚愕（前書き）

目暮警部視点です。

第五話 驚愕

毛利君に、コナン君について調べてみた。
調べるうちに、驚くべき事実遭遇した。

尤も、信じたくない事実だった。

しかし、それを毛利君に伝えないといけないのだ。

わしは、頭を悩まししながら早朝に毛利探偵事務所に向かう。

毛利探偵事務所へ続く階段を上りながら、この事実をどういう手段で伝えようかと考えていた。この事実は、わしらとコナン君と今まで築き上げた関係を壊すものだった。出来れば壊したくないが、わかつてしまった事実を目を背けることは出来ない。

「失礼する」

わしは、事務所のドアを開けた。毛利君は、事務所の机の椅子に座ってヘッドホンを付けてラジオを聴いている。蘭君は、毛利君のヘッドホンを取り上げ一言二言いうと毛利君は慌ててわしの方に向かって来た。

「これはこれは、警部。で、今日はどういったご用件で」

「一昨日、君に頼まれた件だが…」

「ねえ、お父さん。目暮警部に何頼んだの？」

「コナンの両親を探すことを頼んだんだよ。さすがに、一般人の俺には無理だったんだよ」

「ふん。…それで、目暮警部。コナン君の両親の居場所はわかりましたか？」

「実はだな。毛利君」

わしは一拍置いてこのどうしようもない事実を言うことにした。

「コナン君に戸籍がない」

「えっ……」

毛利君と蘭君が、この事実を理解するまでわしは待つことにした。
この事務所に静かさが満ちる。時計のちくたくだけが小玉する。

「…目暮警部。それじゃあ…コナンの両親は…」

この事実を理解した毛利君が、第一声を上げた。

「いないってことになる。この前に現れた江戸川文代という女性も存在しない」

「……」

「つまりだ。コナン君は、偽名を使っていたことがわかる」

「…ぎ…め、い」

「コナン君の本名は、君たち知らないかね」

「…知るわけないでしょ。警部」

「このことを、コナン君に聞くことにする。明日の六時、蘭君と毛利君はコナン君の病室に来てくれるのかね？」

「…私は、毎日いつて看病しているので来れます」

「あのガキンチョは、一体何隠してやがるんだ！ 目暮警部。私も聞きに行きますよ。勿論。しかし、目暮警部…」

「何かね。毛利君」

「あのガキンチョは、何も言いませんよ。きっと。何を問い詰められても黙っているだけだと思いますよ」

毛利君は悟ったような口調で言う。わしもそう思うと頷く。どう

もあの少年・コナン君には、問い詰めても笑って誤魔化されると安易に予想がつく。

しかし、明日は誤魔化されない。何が何でも、偽名を使っている理由を聞かないといけない。

第五話 驚愕（後書き）

短い文章ですみません。しかも、乱文×駄文で本当にすみません。

コナン「どうするんだよ！」

花子「何が？」

コナン「どう誤魔化すんだよ！ 目暮警部が、誤魔化されないと断言しているんだぞ！」

花子「平成のシャーロックホームズなんだから、考えなさいよ！」

コナン「そういう問題じゃねーんだよ！」

花子「どういう問題？」

コナン「組織の残党がいるかも知れねーんだ。言えるわけねーだろ」

花子「でも、ジヨディ先生と赤井さんが残党と今、戦っていますよ

！」

コナン「な、何いー」

花子「それで、次の話は…

コナンとジヨディ先生の会話中心に書きます。

それでは、10人の方にお気に入り登録してありがとうございます。

第六話 組織（前書き）

コナン視点です。

第六話 組織

今、おっちゃんも蘭もいない。それを見計らったのか、ジョディ先生が組織の残党のこと俺が撃たれた後のことについて話しに来た。俺が、ジンに拳銃で撃たれてすぐにジョディ先生が救急車を手配した。ジンは、そのあと赤井さんに右肩と左足を撃たれた…ところまで、記憶している。途中で意識を手放したからだ。

「coolkidが、撃たれて意識がないあとのことはシュウの方が詳しい。けれど、シュウはcoolkidに会いたがらないし…私が説明するわね」

「教えて、ジョディ先生。俺が、意識を手放してからの状況を」

「ええ。教えるわ。そのあと、ジンはあの方…いいえ。工藤優作」

「ちよつと待ってくれ…あの方って、父さん…いや、工藤優作だったのか!？」

「ええ。そうよ」

出来れば否定したい真実だった。父さんのことは尊敬を通り越して、憧れていた。そんな父さんが、どうして黒の組織のあの方なんだ。信じたくない。

だけど、真実はいつも一つだ。父さんがあの方だと真実を聞かない。

「工藤優作は、犯罪学に興味を持ってある研究者と会っていた。そして、犯罪学を学ぶうちに自分を犯罪を犯すことに興味を持った。自分は作家であるから、柔な犯罪はしたくない。素晴らしい犯罪をしたいから。それが大きくなって、こういうことになったみたいよ」

ジョディ先生はあの方が、どういう経緯でこういうことになった

ことを話してくれた。俺は、聞きたくなかった。父さんの知らない一面を知ってしまった。

「それで、ジンはあの方…もとい工藤優作にこう言ったわ。“話しが違う”とね。そして、工藤優作は拳銃をジンのおでこに当てて“所詮、お前は捨て駒でしかない”といいつぐに拳銃の引き金を引いた。ジンは即死。そして、工藤優作は私たちに向かって言った。最初は、どういう経緯でこういうことになったか。最後に、拳銃を自分のこめかみに当てながら言った。

“息子に伝えてくれ。いかなる時も、冷静でいろ。罪を犯してはいけない。お前は優秀な探偵だ。しかし、探偵である前に自分が工藤新一ってことを忘れるな。私みたいに、工藤優作であることを忘れてしまうから。”

そして、引き金を引いた。間違えなく即死だったわ。これで、一幕閉じたのよ」

「…父さん」

小さい声で呟いた。

父さんは、自分が工藤優作ということ忘れて犯罪者になっていったんだ。何故、そのことを俺は気が付かなかったんだ。

何が、高校生名探偵工藤新一だ。父さんが、犯罪を犯していることを知らないで呑気に探偵を名乗れた自分が恥ずかしい。

「それと、コナン君。あなた、工藤新一の連絡先知ってる？ 工藤優作の遺体を引き取ってもらいたいのよ。工藤有希子は、断固として拒否するの」

「…工藤新一は、ここにいます」

俺は、真剣な表情をしてジョディ先生をまっすぐに見つめた。

「え、ちよつと待ってコナン君。工藤新一は高校生よ。あなたは小学生じゃない」

「実は、組織を追っていた理由はA P T X 4 8 6 9のデータを手に入れるため。A P T X 4 8 6 9は、人の体を小さくなる作用があるんです。俺は、組織の取引現場を目撃して口封じの為にA P T X 4 8 6 9を飲まされてこの姿になりました」

そう。トロピカルランドに行った時に、組織の取引現場を目撃して口封じのためにA P T X 4 8 6 9を飲まされたんだ。もしかしたら、父さんの計らいだったりするかも知れない。父さんは俺の探偵の血を知っている。怪しげな人物を見たら追う可能性も十分にある。きつと、五分五分の賭けでA P T X 4 8 6 9の効果を試そうとした。

――息子なら殺してもいいだろう。

そんなことを考えていたかも知れない。だけど、真相は闇の中でよくわからない。母さんなら知っているかもしれない。でも、知っていても教えてくれるだろうか。母さんのことだから、教えないだろう。多分な。

「ということは、かなりショック？ あの方が、実の父親だったことを」

「ショックじゃないと言えば嘘になりますね。尊敬を通り越して憧れていましたから」

「そう……」

「でも、真実はあの方が工藤優作だと語っているんでしょう。俺は“真実はいつも一つ”という。だから、一つの真実に俺は向き合っていますよ」

「……工藤君」

ジョディ先生は寂しげな声で俺の本当の名前を呼ぶ。

「大丈夫だよ。ジョディ先生。ショックだけど、真実に向き合っていくます」

「大丈夫ならいいんだけど…」

そうは言ったものの俺は相当ショックを受けている。

懂れていて信じていた父さんが、組織のあの方だったことを。

「それで、ジョディ先生。組織の残党はどうなりましたか？」

「…何とか、捕まえたわよ。大変だったのよ」

「よかった…」

「ひとまず安心ってことね。coolkid…あ、これでベルモットのcoolguyと呼んでいた理由がわかったわ」

「…それより、何故ベルモットは自主したんでしょっか」

「そうよね…人を殺すことを躊躇わない人が自主をするはずがない…」

「それは、私が頼んだのよ」

「か、母さん！」

病室の中にいつの間にか入ったのか分からないが母さんがいた。そっいえば、ベルモットの本名はシャロン・ヴィンヤード。シャロ

ンと母さんは黒羽盗一に変装術を教わる為に弟子入りしていた。と
いつか聞いたことがある。

「シャロンが人を殺したことを知ったのは、新一のせい。私は、シ
ヤロンを死なせたくなかった。だから、自首してと頼んだの。中々、
承諾しなかったの。だけど、よくわからないけど……」シルバーブレ
ットに、よろしくね”と言って私を眠らせてどこかに行ったと思え
ば、警察に自主していたの！」

母さんは涙目になりながら、ベルモット……もといシャロンの自主
の経緯を話した。辛いのだろうか。親友と愛する伴侶が犯罪者だっ
たからだ。

「シルバーブレットね……。ベルモットもよく言うね。母さん。シル
バーブレットは、俺だと思うけど」

「……新一。シャロンはベルモットじゃないの！ シャロンはシャロ
ンなの！ ベルモットじゃないの！」

「……母さん。俺は、シャロンを知らない。ベルモットとして出会っ
ていたし、俺はベルモットの一面しか知らない。だから、シャロン
とは言えない」

「し。新一！」

厳しいことを言ったかも知れない。でも、俺はベルモットとしか
知らない。シャロンとしては、ハリウッド女優しか面識がない。だ
から、今さらシャロンと呼べと言われても無理だ。

「ジョディ先生。父さんの遺体はどこにありますか？」

「警察病院に、遺体を保存しているわ。でも、工藤君。あなた、ま
だ退院出来ないのよね……」

「え、はい。でも、三日後には退院できると思います」

「で、工藤優作の遺体はどうすれば…」

「父さんに、別れを言いに行きます。母さんも行く」

「し…新ちゃん」

「だから。ジョディ先生は、まだ燃やさないでください」

「…わかったわ。そう伝えるわ」

ジョディ先生は悲しく呟くと病室を出て行った。母さんは、今に泣きそうだった。それは当たり前のことだ。愛した夫は犯罪者で自殺。信じていた親友は犯罪者だった。

「母さん。泣いていいよ。今回だけな」

「…新ちゃん。じゃあ、泣かせて」

母さんは、俺に抱きつく。

「新一いい…」

あんまり泣かない母さんが、大泣きをした日と俺があの方の正体を知った日。きっとこの日を俺は忘れない。

忘れてはいけない。父さんがあの方で犯罪者だと知った日。

「母さん。俺だって辛いさ。憧れていた父さんが組織のあの方だったことや犯罪者だったことを」

頬をぽつりと冷たい水が一滴垂れた。
多分。俺の涙だろう。

第六話 組織（後書き）

長文？×駄文 を読んでくださってありがとうございます。

コナン「変な展開過ぎるだろ！」

花子「そうかしら……」

コナン「それに…なんで、父さんをあの方にするんだよ！ 展開がひどすぎるだろ！」

花子「なら。博士に変更しろとでも？」

哀「それは、許せないわよ。工藤君。あの方予想ランキングでいくら、博士が一位だとはいえ、温厚な博士があの方だったら私…死んじゃうかも知れない…」

コナン「灰原…」

花子「…」

哀「それに、私は最初的一部分しか出ていないんだから！」

花子「じきに出ますよ」

次回もよろしくお願いします。

第七話 追及（前書き）

園子視点です。

第七話 追及

蘭は部活。今日はテニス部がお休み。私は、あの眼鏡のガキンチヨのお見舞いに行く。

別に、眼鏡のガキンチヨのことは好きではないが蘭の代わりに行くだけ。感謝しなさいよ。コナン君。それに、新一君がいる場所をあの子知っているみたいだから聞かないといけないよね。蘭のために。

病室のドアを開けようとした時に中から話し声が聞こえた。立ち聞きするつもりはなかったけれど、してしまった。

「なんなら、工藤。どないする？ おとんがあの方だとわかって」

「どうもしねえよ。別に、父さんがこの事件の黒幕だってだけで周囲が変わるわけねーだろ？ ジョディ先生が言うには、この事件は公にするつもりはないらしいよ。まあ、それは俺への配慮だろうな」
「配慮？ どないしてその結果になるんや。工藤」

「とても大きな組織の黒幕が世界屈指の推理小説家。んで、息子は高校生探偵の工藤新一。これをマスコミはどう叩く？ なあ、服部」

どうして。服部君だっけ…。どうして、服部君はコナン君を工藤と呼ぶの？

それに、何で服部君のことを服部と呼び捨てにするのよ。十歳の差もあるじゃない。

とにかくこのことは聞かさない。

「…そやな。工藤、大きく叩くだろうな。工藤が組織の仲間だと叩く…」

「お、おい。服部」
「なんや。工藤」

私が病室のドアを開けたことに気付いたコナン君は、切羽詰まった表情で私を見る。それに気づいた服部君は焦ったような驚いたような表情で見る。

「…今の話。何？」
「それはやな…」
「あなたは黙ってなさい！」
「は、はい」

私の剣幕に負けて押し黙る服部君。それを混乱したような焦ったような表情で私を見る。

「…園子、姉ちゃん…いつから、来たの？」

先程までの会話の声とは異なる子どもの声で私に聞いてきた。もう騙されない。

「さっきの話し何？」
「な、何でもないよー」
「それに、何で服部君は眼鏡のガキンチョのことを工藤と呼ぶの？それに、何でコナン君は服部君のことを服部と呼び捨てにするの？」

「…平次兄ちゃんのことを、僕が呼び捨てにする？ 平次兄ちゃんと僕は歳が十歳も違うじゃない」
「そやそや」
「そ…それは…」

でも、先程の会話はどうしても同じ年の友達とするような会話よ。それに、あの言葉遣いどこかで聞いたことあるのよ。誰だったか忘れたけど。

「でも、おかしいわよ。さっきの会話はどう見ても同じ年の友達とするような会話よ!」

「…確かに、心は同じ年だけだな…」

ぼそつと眼鏡のガキンチョが呟いた。たまたま、私の耳に届いてしまったのが不運ね。

「確かに、心は同じ年だけだな？ それ、どういう意味よ。眼鏡のガキンチョ!」

「…そ、それは…それに、見て僕は子どもだよ。子ども」

「子どもになつた訳は分からないけれど…どうも、あんたを見てみると生意気で優しい女房をほつたらかしてほつき歩いている馬鹿旦那を思ひだしてむかつくのよね」

「悪かつたな。馬鹿旦那で…」

ぼそつと眼鏡のガキンチョはまた呟いた。聞こえないように言つたつもりの方だけど、この園子様にの耳にちゃんと届いたわよ。

「悪かつたな。馬鹿旦那で??」

「…やべっ」

「どうということよ。説明して頂戴!」

眼鏡のガキンチョは服部君の方を見てSOSを出したみたいだけど服部君はそれを無視したみたい。

「あんニャロ… 園子姉ちゃん。説明できるわけないよ。もともと、

僕子どもだし」

「じゃあ、幼稚園はどこに行ったの？ 両親の名前は？」

「お母さんの名前は江戸川文代…。お父さんの名前は…」

眼鏡のガキンチョは考えてないという顔をした。

…思いだした。この顔をどこかで見たことがあるのかを。

「眼鏡のガキンチョ。あなた、新一君ね」

「なっ…なに、言っただよ。ぼ、僕が新一兄ちゃんのわけないよ。どうしたら、高校生から小学生になれるの？」

「そ、それはわからないけど。とにかく、あんた新一君ね。白状したらどうなの」

「は、白状できるかよ…バーロ…」

「白状できるかよ。バーロ？」

「げっ！」

「やっぱり。新一君なのね？ どうしてなの！？ どうして、蘭を待たせるの？ 知っているでしょ。蘭が新一君がいなくて寂しい思いをしているのよ。それを知って笑ってたの？」

「…笑ってなんかねーよ。蘭を待たせて辛い思いしているのは、俺も一緒だよ」

観念して諦めた声で言った。

「これから、言うことは誰にも言っなよ」

コナン君…新一君は、こうなった経緯を詳しく話してくれた。私は事情を知らなかったとは、新一君が辛い思いをしていたことを知らなく蘭と一緒に文句言っていたことを後悔していた。

「…ごめんね。事情を知らないのに、悪口言つて」

「いいんだよ。園子。俺がもとも行けないんだし…」

でも、このことは蘭に秘密にしないといけない。言っちゃダメみたい。本当は言いたい…

だけど、新一君がすごく辛そうな表情で言うから

「蘭には…俺から言つた方がいいだろうな」

余計に言えなくなつてしまつた。

新一君の思いは、蘭以上に深いと思う。騙して行かないといけない日々。本当のことを言つたら、それに巻き込まれる可能性があるから言えない。

蘭の涙を胸を痛めながら見ていたんだ。

「新一君。蘭を待たせたらだめよ」

「わーってるよ。十分に」

そう言つて私は病室を出た。

事情を知つた。それはとても、新一君が辛い思いを知つたことになる。

第七話 追及（後書き）

すみません。

変な展開で…。

ただ、園子には最初にはらす。

蘭の親友としての反応を書きたかったんです。

まだ書けないけど…

次回もよろしくお願いします。

第八話 調査（前書き）

蘭視点です。

第八話 調査

部活が終わると私は急いでコナン君の病院へ向かう。六時に病室で目暮警部とお父さんと、コナン君にどうして戸籍がないかを聞くことになった。それで、私も一応参加することになった。

お母さんに話すか迷ったけど、お父さんは「英理には話すなよ！」とすごい剣幕でそう言われてしまった。だから、話さなかった。

病院の入り口の自動ドアで園子とすれ違った。私は園子に話しかけた。園子は、何か思いつめたような表情をして私に言ってきた。

「蘭。辛い思いをしているのは蘭だけじゃなかったみたい。新一君も…すごく、辛い思いしていたみたい…」

「えっ！？ どういうことなの。園子。新一に会ったの！？」

「…ある意味会ったかも知れない」

「教えてよ。園子。新一はどこにいるの！？」

「蘭。ごめん…」

園子はそういうと涙をちらっと見せながら走って行ってしまった。すごく悲しそうな声だった。

どうして…園子。何で隠し事するの？ 私だけ蚊帳の外なの？ 私たち親友じゃなかったの？

そう思いを秘めながら私はコナン君の病室に向かう途中、服部君とすれ違った。声を掛けようと思ったけど服部君はさっさとどこか行ってしまった。

コナン君の病室に入ると目暮警部とお父さんがすでにいた。コナ

ン君の表情はなんだなんだ？と言いたげな感じだった。

「さて…蘭君も来たことだし。コナン君に聞きたいことがある」

「僕に聞きたいことって？」

「担当直入に言うが、君は何者なんだね？」

「何者って…唯の小学一年生だよ」

コナン君は笑ってはいるものの冷や汗をかいている感じだった。それに、かなり声が裏返っていた。

「…コナン君。君には戸籍がない」

「へっ!？」

「江戸川文代さんという女性もいない」

コナン君はすごい焦った表情をしていた。目暮警部はコナン君の次の言葉を待っている。お父さんは、すごい剣幕でコナンを見つめている。

でも、コナン君は無表情となり俯く。何も言わないと決めたようだった。目暮警部はそれを感じたようだった。

「君は、一体何者なんだね？ コナン君。教えてくれないかね!？」
「……」

「戸籍がないということは十分に怪しすぎる。それに、転入手続きの書類だって調べれば偽装されたものとわかる！ 君は何者なんだね。本当に小学一年生かね？」

「そうだぜ。コナン。お前は何者なんだ!？ この一ヶ月。どこに行っていたんだよ!」

「……」

「コナン君。お願い。あなたは何者なの？ どうして、私を守ってくれるの。赤の他人なのに……」

「ら…ん姉ちゃん」

「おい。コナン。教える。俺たちに知る権利があるんだ。預かって
いる身としてはな」

「せめて。コナン君。せめて、前はどこに住んでいたか教えくれな
いかね!？」

「コナン君…教えて…」

「……米花町」

コナン君はポツリと呟いた。それだけしか言わなかった。お父さ
んは冗談じゃないという顔でコナン君に怒鳴りかかる。

「米花町だあ？　今も住んでいるところじゃねえか。本当はどこな
んだ!？」

お父さんは両手をコナン君の両肩においてゆする。コナン君冷め
たような無表情でまたポツリという。

「米花町にずっと住んでいる。蘭姉ちゃんたちのところに居候する
以前も」

「はあ？」

「それは、本当かね。コナン君」
「……」

それ以上は言わないと決めた表情で目暮警部を見る。そして、私
を見て寂しそうな表情を一瞬だけ見えてまた冷めたような無表情に
戻り顔を俯く。

「コナン君…教えてよ。あなたが何者なのか…私、いつも守っても
らっているから教えて欲しいの!？」

寂しそうな表情で私を見たコナン君。寂しそうな表情で、瞳は私を射抜くような鋭さを放っていた。

「蘭姉ちゃん。いつか、教えるよ。僕が何者かも。すべて話すよ」

優しく柔らかい口調で私にだけ聞こえるように言ったコナン君は、寂しそうな表情から優しく穏やかな大人っぽい表情になっていた。

そしてコナン君は、真剣な表情に変わると目暮警部とお父さんに真剣な声でいう。

「いつかわかると思うよ。僕が何者かが。いずれ…わかると思うよ。だから、今は何も聞かないで欲しいな。目暮警部とおじさん。それに…江戸川コナンでは戸籍はないと思うけど、その何者かだとちゃんとした戸籍はあるから」

コナン君は“それに…”の後からトーンを落として言葉を吐き捨てる。とても小学一年生だと思えない気配を少しだけ出しながら。

その気配をお父さんと目暮警部は気付いたのか、戸惑いながら慎重に言う。この気配は、人を戸惑わせてしまうような感じで何とも言えないぐらいで、表現が難しくすごい気配を出している。

…でも、この気配。懐かしい。知っているような気がする。

「わ、わかったよ。コナン君。無駄な調査はやめるよ。君が何者か調べて調べるのは、やめるよ。今は駄目ってということが十分にわかったから」

「…そう。警部さん。今は駄目なの。だから、余計なことはいらないで。お願い」

コナン君は子どもの声を保ちながら脅すような口調でいう。
一体、何者なの。コナン君。ますます、何者かって気になるじゃ

ない。

「では、毛利君。わしらは帰ろうか…」

「そ、そうですね。警部…帰りましょう。ほら。蘭。帰るぞ」

「コナン君の看病するから、二人は先に帰っていいわよ」

「そ、そうか」

お父さんは逃げるように病室を出て行った。目暮警部も出て行った。

コナン君が放ったあの気配。私は知っている。だけど、誰が出した気配だったか忘れてしまった。とても、大切な人だったかもしれない…。

「蘭姉ちゃん。明日も学校あるでしょう。僕の看病はいいから、帰りなよ」

「駄目よ…コナン君。私は、あなたの正体を知りたいの!」

わかった気がした。コナン君が何者なのかを。でも、それはアダムとイブの禁断の果実と一緒に触ってはいけない気がした。

だけど、私は知りたい。コナン君が何者なのかを。どうして、私を命がけで守ってくれるのかを知りたい。

「教えて…ねえ。コナン君」

コナン君は、寂しげな表情をして私をみる。瞳も本当に寂しさに満ちていた。

「教えてくれる?」

「…まだ、駄目なんだ」

「どうして!?!」

「言えないよ。蘭姉ちゃん」

コナン君が本当に寂しげな声でいう。瞳は潤っている。泣きたいのはこらえているのがわかる。

「いずれ言えることだから。安心してね。蘭姉ちゃん」

コナン君は柔らかく優しい声でいう。何となく、私は安心した。いずれわかること。せかさなくても、教えてくれる。

その“いずれ”まで、私はコナン君が何者かを考えるのはやめよう。

コナン君がそう願うのなら。

「わかった。その“いずれ”まで待つわ。約束する」

「ありがとう蘭姉ちゃん」

コナン君は、可愛い声でさういふと笑顔に戻っていった。

コナン君の物寂しいさうな表情はみたくなかった。私まで、寂しくなるから。

だから、コナン君が安心できるように私は知りたい気持ちを抑えないといけない。私の方が、年上のなのだから我慢しないといけない。

「ごめんね。本当に“いずれ”が来るまで言えないんだ。蘭姉ちゃん、ごめんね…」

「いいのよ。コナン君。今はまだ駄目なだけなのよね」

「うん。事の始まりは終わっているけど。自分のことに関してはまだ片付いてないから」

「そうなの」

コナン君は、何を一体背負っているのかな。

私たちにはとても背負えないようなものかな。でも、いずれわかることだから。今は気にしないようにしないといけないよね。

そうコナン君が望むなら、私は我慢する。いずれ…その時が来るまで待つことにしよう。

第八話 調査（後書き）

乱文×駄文を読んでくださってありがとうございます。

哀「いつになったら、私は出るの？」

花子「いずれ出る。A P T X 4 8 6 9 あほときしんの解毒剤の鍵を握るのは、灰

原。あなただから」

哀「いつ出るの？」

花子「予定だと次の次回り……」

哀「あらそう。さて、出て行かないとね」

哀ログアウト。

それと、第五話の驚愕の日にジョディ先生と有希子がコナンの病室にいて話しこんでいました。第七話の追及はその次の日。服部がやつとのことで和葉ちゃんから抜け出してコナンに組織のことを教えてくれとせがみ事件の全貌をジョディ先生の話そっくりそのまま話した後に、このことについて言い合っているうちに園子が立ち聞きしてしまい追及されて……

というか、この時コナンは服部と長時間？（約一二時間程度）、江戸川コナンではなく工藤新一として接していて、まだ工藤新一のモード？から抜けださくてついつい園子のからかい？の言葉に口を滑らせてしまった。コナンのミスです。

そのあと、園子は帰り蘭とすれ違う。で、服部はまだコナンと話そうと思ったが目暮警部&小五郎に追い出されて不機嫌になり蘭とすれ違っても無視しただけです。

それでは次回もよろしくお願いします。

第九話 確信（前書き）

小五郎視点です。

第九話 確信

俺は、逃げるようにしてコナンの病室を出た。そのあと、目暮警部と別れて家に帰るまでの途中の居酒屋で酒を飲んでいた。

しかし、酒など口に通らなかった。俺は、コナンが何者か知ってしまった。いや。薄々気づいていたけど、それはただの疑惑でしかなかった。でも、今日で疑惑は確信に変わってしまったのだ。

それを確認したい。コナンの奴は、今は話したくないらしいが俺はお前に確かめたいことが山ほどあるんだ。

俺は、金を払うと居酒屋を出た。そして、ある物を取りに探偵事務所に一旦帰り、米花総合病院に向かう。蘭はまだ看病しているだろう。無理にでも追い出して、コナンに俺の確信を話してやりたい。

米花総合病院に入り、そのままコナンのいる病室に向かう。病室のドアを開けると蘭はコナンの看病をしていた。

「蘭。お前は帰れ。俺は、コナンに話したいことがある」

「え…でも」

「お前がいる前で話したくない話だ」

「わかった」

蘭はそう頷くと病室から出て行った。俺は、出て行ったのを確認するとコナンのベッドの前に立った。俺は、真剣な眼差しでコナンをみる。コナンは状況が理解できていない顔で俺をみる。

「コナン。俺は、お前が今話したくないというのを無視するがいい

な」

「おじさん。どういう意味？」

「あのな…そろそろ。ガキの振りすんのやめろ。お前も辛いだろ…」
「な、何言ってるんだよ…おじさん…」

コナンは状況が理解したのか焦った表情に変わった。また何か言い訳を考えているはずだ。それを言われる前に俺は話し始める。

「前にも言ったよな。お前は工藤新一か？ ってな。そしたらお前は、『や、やだな』 僕、子供だよ。新一兄ちゃんのわけないじゃない』と答えただろ。自然な言葉だったかも知れないが、後でよく考えたら不自然すぎる。まずは、僕、子どもだよ。といったところ。普通の子どもは、自分を子どもだとは言わない。それに、お前の場合妙に切れる頭を持っているからすごく不自然だ。

そのあと、お前はこう言った。『それに、新一兄ちゃんは高校生だよ。僕は小学生。高校生が小学生になれるわけないじゃない？』とさっき言ったように、普通の子どもは自分を子どもだと言わない。

そのあとの言葉が問題だ。

お前は自信を持った声で言ったよな。『高校生が小学生になれるわけないじゃない？』と。何か確信があったような声だったよな。そこから、考えると…」

俺は一旦、言葉を切った。コナンの表情は顔は笑っていたがかなり焦っている感じで俺に向かって言った。

「そこから、考えるとどうなるの？」

「お前は、高校生が小学生になれるわけないと確信を持ちながら言った。仮に考えたとお前は、高校生が小学生になれると知っていた。でも、一般常識では絶対にあり得ないことだ。それを逆手にとってお前はそう言ったんだ」

「……」

俺はコナンの表情を窺った。自嘲気味に苦笑いをしていた。そして、俺に向かって言う。化けの皮を被ったままの声で。

「じゃあ、僕が高校生だって言うの？」

「そうだ。小さくなった理由は知らないが、お前の正体は高校生。まず、俺は蘭の昔のアルバムを見てみた。小学一年生辺りの。そこで驚くことに、眼鏡を取ったコナンの顔が小さいころの新一そっくりだ」

俺は、事務所まで取りに行ったアルバムの写真を二枚胸ポケットから出した。一枚は蘭と新一が、二人だけ映っている写真で二枚目は蘭と新一と英理と有希子ちゃんが映っている写真だ。

それで、俺はコナンの眼鏡を取った。コナンは焦ったように手をばたばたさせながら眼鏡を取り返そうとしたがコナンの眼鏡は俺の胸ポケットにしまった。コナンは諦めたようにため息をつく、次に備えて考え始める。それを無視して、話しを始める。

「これは、小さいころの新一の顔がよく映っている写真だ。コナンの顔とまるつきり瓜二つだ。ここまで瓜二つなんて不気味だ。兄弟という可能性はあるけれど、有希子ちゃんに二人目の子が出来たと聞いてはない。新一に弟が出来たら、蘭が何かかしらは俺に言うはずだ。しかし、この七年新一に弟が出来たなど聞いてない。だから、兄弟の可能性はまるつきりゼロだ。遠い親戚だと、お前は言ったな？ でも、ここまで遠い親せきが似ていたらおかしすぎる。そこで、たどり着いたのは……」

一回ここで切る。コナンは、“やばい”という表情で俺を見た。その表情が、余計お前の正体を物語っている。

「お前の正体は、蘭の幼馴染の工藤新一。何らかの理由で、体が小さくなったんだ。それで、何らかの理由で偽名を使うことになった。違うか？」

「…はあー。そうだよ。おっちゃん。俺は、工藤新一だよ」

コナンは観念した表情で俺を見た。呆れかえった表情の混ぜながら。

「それと。眠りの小五郎は、お前の仕業だろ」

「…ああ」

「さうて。探偵坊主。お前には、聞きたいことがたくさんあるんだ。答えてもらっつ」

「何を？」

「何で、居候先を事務所を選んだんだ？」

「そ…それは…」

「答える！」

コナン…新一は、ため息をつくと話し始めた。小さくなった理由と一ヶ月の失踪のこと。そして、どうして俺を眠りの小五郎に仕立てたかを。

「ごめんな…おっちゃん。別に悪気あつて、眠らせたわけじゃないんだ」

「…いや。いい夢を見させてもらっただから、感謝するよ」

眠りの小五郎に仕立てた理由。それは、新一を小さくした組織の情報を仕入れるため。でも、案外組織関連の情報はあまり入って来ないから焦っていたらしい。

それで、もう蘭を待たすわけにはいかなーかと思ひ自分で組織の情

報を見つける為、組織の事と江戸川コナンの正体を知っているある人物と一緒に二週間、全国を飛び回って情報仕入れたらしい。そして一週間は、西の探偵坊主を入れてその組織の関連した建物に侵入して、本拠地のデータを手に入れる最中に西の探偵坊主は怪我したらしい。そのあと、一週間はFBIに情報を提供してFBIと共に組織の本拠地に侵入して、銃撃戦の後ジン…と言っただけ、ジンに撃たれてしまいそのあとは米花総合病院にいたらしい。

これが一ヶ月間の失踪の真実だった。

「それより…目暮警部は、どういう経緯で、お前が緊急手術していること知ったんだ」

「ああ…それね。きつと、FBIの誰かが目暮警部に連絡したんだと思うけど…。何でだろうな…」

これは目暮警部に聞く必要があるだろう。

「じゃあな。新一。早く、元の体に戻れよ！」

「…戻りたいですよ、早く」

病室を出て、俺は目暮警部に電話を掛けようとしたが生憎なことにここは病院だった。さつさと、俺は病院の外を出て目暮警部に電話を掛けた。二回のコール音出た。

『もしもし目暮だが』

「毛利です。目暮警部。聞きたいことがあるのですが」

『何かね？』

「どうして、目暮警部はし…コナンの手術を知ったのですか？」

『それはだな…毛利君。名前もない男から、わし宛に電話が来たんですよ。そしてこう言ったんだよ。“江戸川コナンという少年が何者かに撃たれて米花総合病院に緊急手術中だ”と。わしはすぐに、

確認するとその男の言つとおり、緊急手術だったんだ。それがどうかしたんだね。毛利君』

「い、いえ別に。それではありがとうございます」

電話を切ると、俺は空を見上げる。一体だが、新一のことを教えたんだろう。新一は、知っているか不思議だ。唯、知らない様子だった。

誰なんだろ。コナンが撃たれたことを知っていて、目暮警部に電話を掛けた男は。

第九話 確信（後書き）

どうも。乱文×駄文を読んでくださってありがとうございます。

それより、ある人物って誰でしょうね。電話を掛けてきた男は誰でしょうね。

次回もよろしくね。

第十話 触れてはいけない（前書き）

蘭視点です。

第十話 触れてはいけない

病院からの帰り。私は、自宅である探偵事務所に帰る。本当は、もつとコナン君の傍にいたかったけれどお父さんが、私に聞かれたくない話だって言って追い出されてしまった。

多分。お父さんはコナン君が何者か気づいている。それを確認したのだろう。きっと。

だって、お父さんの瞳が真剣だったから。でも、何で私には聞かれて欲しくないのだろう？

そう思った時、目の先に赤みがかかった茶髪の女の子がつんとした表情で歩いてきていた。その女の子に見覚えがあった。

「哀…ちゃん？」

私の声に気付いたのか、哀ちゃんは真剣な眼差しで私を捉える。とても、子どもとは思えない雰囲気纏っている。コナン君みたいに。

「蘭さん…」

「哀ちゃん。どうしたの。こんな時間に」

「…江戸川君の見舞いに…」

「それなら、少年探偵団と一緒に行けばいいのに」

「……江戸川君だけに話したいことがあるから…」

俯きながら哀ちゃんは言った。コナン君だけに話したいことがあるって…もしかして、哀ちゃんはコナン君の正体を知っているの。

「ねえ。哀ちゃんって…コナン君の正体知ってるの？」

考えていた矢先に、思わぬことを口走ってしまった。哀ちゃんは、驚いた表情をほんの一瞬見せたがすぐに口元だけで笑って、私の顔をまっすぐに捉えて言った。

「ええ。知っているわ」

「コナン君の正体って、誰なの？」

「それは、言えないわ。でも江戸川君の正体は、蘭さんに近い人は確かだけど…」

哀ちゃんはそれだけ言うと、足早に去って行った。私はそれを見つめて、哀ちゃんが見えなくなると自宅に向かって歩き始める。

私に近い人は確かって…誰だろう。

もしかして…新一？ だけど、学園祭の時はコナン君と新一が同時に存在した。でも、よく考えるとあのときのコナン君はいつもの雰囲気とは違っていた。いつものように出しゃばらなかった。

誰か別人の変装。

誰かとまでは分からないけど、確かあのとき哀ちゃんが風邪でいなかった。もしかしたら、哀ちゃんの変装していたのかな。哀ちゃんはコナン君の正体を知っているし、説明が付く。

それに、登校中で私が遅刻するわよと言った時新一は確か、私に對して…

『待つてよ！ 蘭姉ちゃん』

って言っていた気がする。慌てて訂正してたけど、今思うとおかしすぎる。

でも…コナン君は、今は自分が何者かについて触れないで欲しいと言っていたよね。

だから、今…言ってはダメなのかな…。コナン君、私の気持ちを知らないわけないよね。

私が新一に会いたい気持ち。

アダムとイブみたいに禁断の果実を触れていいですか？

あなたの場合、眼鏡の奥の瞳に眠る真実を触れていいですか？

明日。眠る真実を覚ましてあげてもいいですか。コナン君。

第十話 触れてはいけない（後書き）

やっと灰原登場。

次回は哀視点です。

第十一話 目安（前書き）

哀視点です。

第十一話 目安

蘭さんと少しだけ話して、私は工藤君が入院している米花総合病院へ向かう。APTX4869の完璧な解毒剤が出来るまでの目安を伝えるに行くため。

米花総合病院の前に着くと、毛利探偵が誰かと電話していた。私は、それを横目で見ながら米花総合病院に入る。工藤君の病室には、今は誰もいないはずだ。大阪の探偵君は、今博士の家に泊っている。病室の中に入ると、工藤君はぼーっとした顔で天井を見ていた。私は、ベットの方に向かうとすると――

「まさか…偽物の拳銃を持ってきて、組織がなんたらかんたらと語るわけねーよな？」

以前、解毒剤の試作品のことを話す前に偽物の拳銃を工藤君に突き付けたことがある。そのことを、工藤君は言っている。

「ないわよ。工藤君、APTX4869の完璧な解毒剤が出来るまでの目安を伝えに來ただけよ」

「そっか。で、解毒剤が出来るのはいつだ？」

「早くても一ヶ月、遅くても三ヶ月程度」

「そうか…。そっいや、灰原はどうするんだ？ 元の体に戻るのか？」

「…戻るつもりはない。元に戻っても、待っている人がいない。それに…あの子たちが、可愛そうでしょ？ 私と工藤君が一気にいなくなったりしたら…」

「そうだよな…あいつらには…どう話せばいいんだよな…」

私は戻らない。あの子たちと一緒にいると私はとても幸せな気分

になっていた。今の方が、自分には幸せと感じる自分がいた。自分は幸せになれないと思っていた時とは違う自分を見つけてしまった。私は灰原哀として生きていたい、強く思うようになっていくような気がする。

「工藤君。あなたは、外国に転校するだけでいいの。本当のことは、いつかあの子達に話す日が来ると思うわよ」

「いつか…ね」

「…それより、工藤君」

「何だ。灰原」

こんな時に言ってもいいことがわからない。でも、言いたい気分にかられる自分がいた。

「工藤君。私、工藤君のことが好き。だから…、蘭さんを好きにならないで。私を好きになって！ 私…工藤君のことが、好きなの！ 嘘じゃない。本当よ！」

工藤君は押し黙ってしまった。

蘭さんには、正直勝てないのは理解している。わかってる。両想いではないことを。でも、工藤君の答えを知りたい。

「答えが、欲しいの」

「灰原…」

工藤君は切なそうに私の名前を呟く。

愛おしい。工藤君が欲しい。好きだから。

蘭さんが憎い。工藤君を奪っていく。本当に憎たらしい。

「…ごめん」

「やっぱり…蘭さんが、一番好きなのね」

「いや。もし、俺が江戸川コナンだけだったらお前のことが好きだった。微妙な恋愛感情を、灰原お前に抱いていたことは本当だよ」
「あら…、ありがとう。嬉しいわ」

やっぱり。工藤君は、蘭さんが大好きなのね。

だけど、悔しい。蘭さんには、私は勝てなかった。

今の工藤君のことは、蘭さんよりわかっているはずなのに…どうして、工藤君は私より蘭さんを選ぶの？

「灰原。俺は…コナンになってから、蘭への思いを改めて気づいたんだ。だから…俺は蘭が好きなんだ」

工藤君は、私の気持ちに気付いたのかそう言った。でも、私の心は虚しさが残るだけ。

こうなるなら、私の気持ちを工藤君に言わなければよかった。

後悔の念が私の心の中に降り積もる。でも、工藤君は蘭さんしか見えていないことを自分が工藤君を好きになった時から確信していたのに。

「…工藤君。蘭さんを絶対幸せにするのよ」

「お、おい灰原！…」

悔しさ・虚しさが押し詰まった感情をこの言葉に乗せて工藤君に吐き捨てた。

私は、病室を出ていく。そして、家路を走る。涙をちらちらと見せながら。博士の家の前に着いた時、私は涙を吹き払うといつものように無表情で玄関の扉をあける。

「ただいま」

「おお。哀君、お帰り」

私はそのまま地下室に向かう。A P T X 4 8 6 9 の解毒剤を完成させるため。パソコンの電源を付けて、しばらくキーボードをいつものように叩き続ける。

でも、気が付くと私は泣いていた。キーボードを叩こうとすると、指が震えて動かない。

「うつ…うつ…」

泣き出してしまっていた。

工藤君に振られて辛い。悲しい。虚しい。

蘭さんに負けて、悔しい。憎い。

今の工藤君は蘭さんより知っているのに、どうして負けるの？

神様は平等じゃないのね。

でも、私の今の使命は工藤君のためにA P T X 4 8 6 9 の完璧な解毒剤を完成させること。

それが、工藤君の中で私の存在を示してくれる。

解毒剤が出来ても渡したくない。

どうしたらいいの？

私はどうしたらいいの。解毒剤を完成させたらいいの？

でも…今、私が完璧な解毒剤を完成させることを工藤君は望んでいる。

だから、私は工藤君の望むことをするしかない。

「…馬鹿ね。私も。工藤君が、蘭さんしかずっと見てなかったのに、それぐらい知ってたでしょ？」

第十一話 目安（後書き）

乱文×駄文を読んでくれてありがとう。

哀「で、更新が遅れた理由は何かしら？」

花子「日本シリーズに夢中だったから。ロッテ対中日！どっちが勝つか。一進一退の戦いを私を予想したが、以外にも一昨日昨日延長で、昨日12回表にロッテが1点を入れて、裏で中日を抑えて「うるさいわね」

花子「まだ、話してる途中。見事に、ロッテは五年ぶりの日本一！」

コナン「よくわからねーけど。とにかく、終わった見てーだな」

花子「そう。ロッテが勝って終わり。さてと、来年はどこ…」

コナン「もうこれ以上話すな」

はーい。

それでは次回は、多分蘭視点です。

第十二話 正体（前書き）

蘭視点です。

第十二話 正体

コナン君が退院する日。私は、空手の練習を早めに切り上げ米花総合病院急いで向かう。米花総合病院に着くと、コナン君が受付の椅子に座って誰かを待っていた。私は声を掛ける。

「コナン君」

「ら、蘭姉ちゃん」

私がいることに気づいて、慌てた様子で私を見る。その時、新一のお母さんとジョディ先生と一緒にコナン君の方にやって来ていた。新一のお母さんが私に気が付くと、にっこりと笑った。

「蘭姉ちゃん。僕ね。今から、行くところがあるの。だから…その…」

「待ってて欲しいのね」

コナン君…本当は、あなたは新一なんですよ。小さくなった理由は分からないけど、コナン君は新一でしょ。

「あ…うん。そうだよ」

「今日は、退院祝いにコナン君が大好きなハンバーグ作ってあげるね」

「うん」

本当は、ハンバーグが好きじゃないことはわかってる。でも、子どもの振りをしているのよね。私たちに気付かれないように。

コナン君は、ジョディ先生と新一のお母さんの方へ向かう。私はそれを見送ると、病院を出てスーパーに向かう。ハンバーグの材料

を買いに行くため。

ハンバーグの材料を買い終え、自宅へ帰る。そして、制服から私服へ着替えてエプロンを付けて、今日の夕飯を作り始める。コナン君がいつ帰るのかは、分らない。

「ただいま〜今、帰ったぞ〜」

お父さんは、大きな声で言う。今日は、珍しく仕事が入って来てこの時間まで仕事をしていた。お父さんは、テレビを付けると沖野ヨーコが出演している番組を見つけてだらしのない声で「ヨーコちゃん」と叫ぶ。

それから、夕飯を作り終えて時計を見ると六時十五分過ぎだった。コナン君はまだ帰って来ない。私は、自分の部屋に行き自分の携帯を取って、新一とコナン君のメールアドレスを見る。よく見たら、似ている。

私は、コナン君のメールアドレスに決定ボタンを押して、メールの件名に『新一へ』と書いてみる。そして、本文には『コナン君の正体、私知っちゃった。新一。コナン君の正体、誰だかわかる?』と書いてみる。コナン君…もとい、新一への意地悪だ。今まで、騙した分仕返ししてもらっわよ。

送信ボタンを押した。そして、私は携帯を置くと一回だけ伸びをして私はリビングに向かう。相変わらず、お父さんは沖野ヨーコが出ている番組を見て情けない顔・声をして、見ている。

私は、台所に置いた夕飯を食卓に置く。ちょうど、その時コナン君が帰って来た。

「コナン君。お腹空いたでしょ?」

「うん…うん」

私は満面の笑みを浮かべてコナン君に言う。コナン君は引き攣っ

た笑みを見せて、自分の席に着く。お父さんも、テレビを見るのをやめて席に着く。私も満面の笑みで、席をつく。

「いただきます」

そう言って、食べ始める。私は、コナン君の様子を窺う。あのメー
ールを見ている。きっと、すごい動揺しているはず。だって、横目
でチラチラと私の様子を見てくるからね。

「コナン君。ハンバーグおいしい？」

「美味しいよ」

「本当に？」

「本当に」

「そう。よかった」

私は、安心した笑みを見せるとコナン君はほっとしたような表情
を浮かべて再び食べ始める。そして、お父さんの携帯が鳴りお父さ
んが受け答えをして私とコナン君に言う。

「麻雀。行ってくるから」

「えーちよつと。お父さん！」

「朝までには帰ってくるからな」

お父さんは、夕飯の食器を台所に置くとすぐにドアを開けて麻雀
に行ってしまった。私は、軽いため息をついて、夕飯を食べ続ける。

「さっきのメールは何」

不意に、コナン君がそっけなく聞いてきた。やっぱり、あのメー
ールを見たんだね。

「何って…何のこと。コナン君？」

「とぼけないでよ。蘭姉ちゃん」

「とぼけてないわよ」

そっちが、折れてくれるまでとぼけ続ける。だって、今まで私たちを騙してきたのは相当な重罪だからね。いくら、理由があろうと騙してきたのは変わらないから。

「だって、僕のケータイに新一兄ちゃんあてに来たんだよ。僕の正体を知ったって、書いてあったよ！ だから、蘭姉ちゃんが僕の正体…あつ。まさか、わざとやったんじゃないよね？ 僕の正体をわかったから！」

「わざとだったら、コナン君の正体って、誰なの？」

この場で、的外れな事を新一^{コナンくん}に言ってみる。そろそろ、化けの皮が取れそうな気がするから。

「えっ。誰って…もう知っているんじゃないの？ 蘭姉ちゃん」

どうやら私から、折れないと言ってくれないような気がしてきた。

「…新一なんでしょ？」

「……」

「コナン君の正体は、新一なんでしょ？ 答えてよ」

「…ああ」

「やっぱり。そうだったのね」

「…へっ？」

私は、箸をがちゃんと置くとコナン君…いいえ新一を抱きしめた。

「コナン君が、新一だったらどんなに嬉しいかずっと考えていた。でも、本当にそうだったんだね」

「……」

「新一…好きだよ。ずっと待ってたよ」

「…ちよっと、話して蘭姉ちゃん。まだ、僕はコナンだよ。コナン。新一兄ちゃんじゃ、じゃないよ」

新一は、子どもの力で抵抗したけどそれも虚しく私に抱きしめられることにしたようだ。

「ねえ。新一。ハンバーグ、本当に美味しかったの？」

「本当に美味しかったよ。だから、放して」

「あ…うん」

私は咄嗟に放すと、新一は夕飯を食べ始めた。頬を赤く染めながら。

「新一、答えて。私のこと、好き？」

「まだ、この姿だから。元の姿に戻ったら教えてあげるよ」

「何よ。偉そうに。子供のくせに」

「中身は、高校生だから」

「それでも、未成年で子どもじゃない！」

「…そうだな。ごめん。今まで、隠して。それには、ちゃんとした理由があるんだ。それと、今までどおりにコナンとして接してくれないか？」

コナンは頼むと両手を合わせて私を見てきた。私は一瞬だけ眼を閉じて、頷いた。

「わかった。じゃあ、コナン君。ごちそうさまは？」

「頼むから子供扱いは、やめてくれないか。蘭」

「年上の人を呼び捨てにしちゃダメでしょ。コナン君」

「……はい。蘭姉ちゃん」

「よろしい」

これが小さな仕返し。正体を知った分、余計に子供扱いしてあげるからね。コナン君。

「言つとくけど好きで、騙してきたわけじゃねーから。蘭」

ぼそっと新一が呟く。

「わかってるわよ。それぐらい。何かしら理由があるのよね？」

「そうだ。今は、まだ言えないけど……」

言えなくてもいい。コナン君が新一だってわかったことが嬉しい。多分。いつか、話してくれるでしょうね。江戸川コナンになった訳を。

約束して。江戸川コナンになった訳を教えてね。

第十二話 正体（後書き）

乱文×駄文を読んでくださってありがとうございます。
次回は、この話のコナン視点です。

第十三話 沈黙（前書き）

コナン視点です。

第十三話 沈黙

退院した。そして、今日。父さんの遺体を見に行く。

病院の受付の椅子に座って、ジヨディ先生と母さんが来るのを待っている。ジヨディ先生が、父さんの遺体がある警察病院へ連れて行ってくれる。

「コナン君」

不意に俺の名前を呼ぶ声がした。誰かと思つて声の方向を見ると、蘭だった。空手部の練習が終わる前に合わせてジヨディ先生と母さんでこつそりと父さんの遺体がある警察病院に行く予定だった。

「ら、蘭姉ちゃん」

すっかり板についてしまった子供の演技で蘭の名前を呼ぶ。そして、蘭は俺の方向を通り越して誰かを見た。その方向を見ると、ジヨディ先生と母さんがいた。

「蘭姉ちゃん。僕ね。今から、行くところがあるの。だから…その…」

「待つて欲しいのね」

俺が最後までいう前に、蘭が遮った。蘭、もしかしてお前。俺の正体に気が付いているのか。でも、俺に向けられるのは小学一年生の江戸川コナンとしての目。その先の工藤新一を見ている目ではない。

「あ…うん。そうだよ」

「今日は、退院祝いにコナン君が大好きなハンバーグ作ってあげるね」
「うん」

蘭はにつこりと微笑みながら『さあ、早く行きなさいよ』と言いたそうな顔をしていた。俺は後ろめたい気持ちでジョディ先生と母さんがいる所へ向かう。暗黙の了解で、ジョディ先生は車が置いてある裏口へ向かう。俺と母さんは、遅れてついていく。

裏口から出て、ジョディ先生の車に乗る。母さんは、後ろ席へ俺は助手席に乗った。ジョディ先生は、車を発進させると父さんの遺体がある警察病院へ向かい始める。

…沈黙。

誰も何も話さなかった。否、誰も話せなかった。母さんは、愛する旦那が世界的犯罪組織のあなた方だったとは受け入れがたい真実だ。しかも犯罪者としての形で死んでしまったのだ。それを、受け入れる形で警察病院に保管してある遺体を見に行くのだ。辛い気持ちなのは、誰でも察しがつく。ジョディ先生はそれに気を使って何も話さないのだ。

じゃあ、俺はどうだ？

俺は世界的犯罪組織のあなた方が父さんだとは、ショックで何も話せないじゃないか。俺は、周りが思っている強くはない。だから、表面的にはショックじゃない顔をしていても内面的には凄くショックだと思う。俺の中ではいつも父さんがいた。小さい頃から、父さんを超えることを目標にしていた。

でも、その目標が犯罪者だった。それがどんなにつらい事実で、悔しくて…

「工藤君。着いたわよ」

ジョディ先生が表情がない声で言った。俺は助手席から降りて、ジョディ先生の案内されるがままに着いていった。母さんは、遅れてやってくる。移動中、色々と考えていたはずだ。父さんの遺体とどう向き合うか考えていたはずだ。無論。俺も、どう向き合うか考えてはいる。

ジョディ先生は、警備員に一言二言話すと父さんの遺体がある霊安室の扉を開ける。俺は、無表情を貼り付けて霊安室に入る。母さんも遅れて入ってくる。ジョディ先生は、扉の前に立って俺と母さんは父さんの遺体と対面する。顔が白い布で隠れていた。

「…父さんじゃないだろ…」

俺は、白い布を取り外しながら、どうか人違いで合ってくれと願いながら遺体の顔を見る。

その願いは虚しく終わり、白い布を取った顔はまぎれもなく父さんだった。見間違えるはずがない。

母さんの嗚咽が聞こえてきた。俺は、呆然として父さんの顔を見る。時が止まった様な気がした。

何もかも終わった様な気がした。俺の中での、父さんの存在は大きかった。

「優作…」

母さんは、父さんの体に抱きつき泣き始めた。俺は…唯、唯呆然とそれを見ることしか出来なかった。

父さんの顔は、笑ってはなかった。どちらかというと、哀しい顔をだった。自分の最後を見て、哀しく思ったような顔だった。

「そんな…顔をするなら、最初から組織なんかを作るなよ！」

俺はそう叫んだ。父さんに聞こえたかどうか知らない。死んだ人は生き返らない。

わかってるつもりだ。今までも、何十回も何十回も事件に遭遇して遺体と向き合っていてわかってはいるはずだ。

でも、俺は父さんが今にでも笑いながら起きて「冗談だよ」と言う事を臨んだ。だけど、そう願っても父さんは生き返らない。

「…父さん。俺は、父さんのことを尊敬してたよ。今でも尊敬しているんだ。でも、探偵である俺はそれを許さない。俺は、どうすればいいんだ。父さん。俺は、父さんを憎むべき相手なのか？ それとも尊敬する相手なのか？ わからないよ…」

俺は、自分と蘭のことになるさっぱりだ。だから、この答えを父さんに投げ込んだ。帰って来れない答えだとわかっている。そんなのとづくにわかっている。

一度死んだ人は生き返れない。頭では分かっている。でも、心では本当にわかってない。

「父さん…尊敬していた父さん。じゃあな…」

俺はそういうと霊安室をあとにした。警察病院の待合室の椅子に座り、茫然としていた。これから、俺はどう暮らせばいいのかわからなかった。あの工藤邸にはもう暮らせない。尊敬していた父さんとの思い出が詰まっていると同時に、組織のあの方と暮らしていた。そのことに気付かずに、俺は優雅に暮らしていた。何が…高校生探偵工藤新一だ。本当に。父さんが組織のあの方と気付かないなんてよ…

「そんなに辛いのか…お前の父さんが黒の組織のあの方だったとは…」

俺が座っている隣の席に、俺の顔に似ていて学ランの少年が座っていた。

「黒羽…何で、お前がここにいるんだ？」

「ちよつとな。西の探偵が、お前が落ち込んでいることを電話で小耳に挟んでな」

黒羽は、俺が行方不明につながった一ヶ月に思い切り関わっている人物だ。

「なあ…名探偵。親父が犯罪者だったなんて、誰でもショックだ。俺だって、ショックだったさ。尊敬する親父が怪盗キッドだったなんてね」

「でもよー。おめーの場合…う、な、何するんだ」

急に黒羽が口を手で抑えた。もちろん、ここが警察関係者がいることを忘れていないようだ。

「とにかく、ここじゃなんだから。外に出よう」

犯罪者である黒羽は、警察関係が一杯いるココが嫌らしい。俺は仕方なく頷くと黒羽は病院の自動ドアに向かっていく。俺はそのあとを追って、警察病院を出ていく。

黒羽との距離を置いて、俺は黒羽についていく。黒羽は目に止まったお店に足を運ぶ。席は秘密の話が出来るように奥の席にした。店員が注文を聞くと、俺はコーヒーと言い黒羽はチョコレートパフ

エを頼んだ。店員が去って行くと、黒羽が話を切り出した。

「…お前に言いたくないことだが、俺の親父を殺した奴がわかったんだ」

言いずらそうに黒羽は言う。学生鞆から一枚の紙を取り出した。その時、俺が頼んだコーヒーが来たので話を中断して俺はコーヒーを受け取る。店員が立ち去ると黒羽は、一枚の紙を俺に差し出した。その一枚の紙には、鉛筆で咄嗟に書かれたことが分かる筆跡だった。一番上に『俺を殺しそうな連中』と書かれたある。三人の名前が書かれてあった。一人目の名前は黒沢仁。二人目の名前は、井上洋二。三人目の名前は…

「チョコレートパフェのお客様は」

「はい。俺です」

黒羽はチョコレートパフェをもらうと猛烈な勢いで食べ始めた。

俺は、それをジト目でそれを見ながら黒羽に聞いた。

「どこから、見つけたんだ？」

「隠し部屋を色々あさっていたら、出てきたんだ。それで、その三人を調べてみたんだ。一応な。黒沢仁は、今行方不明らしい。井上洋二は五年前。殺人罪で服役中だ。三人目は信じたくないから、除外していたが、黒沢仁のことを深く調べるとその黒沢仁は、名探偵が追っていた黒の組織の幹部でコードネームがジン。そのままじゃねーかと、爆笑したけどそんな場合じゃなかった。そのジンは、俺の親父を殺したときは、まだ幹部クラスではなかったらしい。唯、拳銃はそうとうの腕だった。そこから、考えると俺は、三人目が…親父を殺した奴だと思った。消去法でな」

黒羽は殺した奴がわかった理由を言った。三人目の名前は、工藤優作。もちろん、黒羽は俺に気を使って信じたくないと言っている。

「だけど…てめーが追っている組織が犯人じゃねーのか？」

「わからねーよ。もしかしたら、これは親父のじゃねーかもしれないし…。これはわかったというよりは可能性に近いかもしれない」

黒羽がチョコレートパフェを食べ終わったとき、俺の携帯電話が鳴った。新一の携帯の方だった。

「もしもし」

『新ちゃん。どこにいるのよ？』

「あ、ごめんごめん。今から、そっちに行く」

『今すぐね』

母さんの声は明るい声だった。でも、ちょっと枯れていた。

「黒羽…俺は、帰るな…じゃあな」

「お、おい。待て…お金！」

「はあ？ 小学生に払わせる高校生、初めてみたな…それはお前もちで」

これは黒羽のおごりだ。そう言い聞かせると、店を出て警察病院に戻った。こういうときに、子供の特権は頼りになる。だけど、そう思っている自分が虚しくなるけど。

ジョディ先生の車に乗り、工藤邸に向かう。母さんは、しばらく工藤邸にいらしい。俺も、工藤邸で降ろしてもらって探偵事務所に帰って行く。遅くなった理由を考えながら、事務所までもうすぐの時に俺の携帯が鳴る。コナンの方だった。

俺は携帯を見る。メールで、送信したのは蘭だった。多分、早く

帰ってきなさいという内容のメールだろうと思いながら、件名を見た。

…『新一へ』

その場で俺は凍りついた。とにかく内容を見てみる。

…『コナン君の正体、私知っちゃった。新一。コナン君の正体、誰だかわかる？』

蘭。やっぱり、お前。俺の正体知って、このメールを寄こしたのか？

とりあえず、俺は自宅の方へ向かう。

「た、ただいま」

いつもより小さい声で。蘭は俺が帰ってきたことに気付いたのか俺の目の前に立って満面の笑みを浮かべて言った。

「コナン君。お腹空いたでしょ？」

こういうときの蘭には、逆らわない方がいい。俺は、頷くと蘭は

満面の笑みのまま食卓の自分の席に座る。何か、嫌な予感がする…

第十三話 沈黙（後書き）

快斗君のご登場。

快斗「今度は、いつ出れるんだ？」

花子「多分、いなくなった一ヶ月を書くと一杯出てくると思つてよ」

次回もお願いします。

第十四話 子供（前書き）

コナン視点です。

第十四話 子供

食卓の自分の席に俺は、笑顔を見せながら着く。おっちゃんもテレビを見るのをやめて席に着くけど、おそらく沖野ヨーコがもう出ていないから消したはずだ。蘭も、満面の笑みを浮かべて、席に着く。

「いただきます」

とりあえず、夕飯を食べながら蘭の様子を見る。コナンに対する態度は、以前も何も変わっていない。でも、あのメールと病院での会話の違和感。やっぱり、蘭は俺の正体に気付いているのか。確認しないとわからないことだ。

「コナン君。ハンバーグおいしい？」

不意に蘭が言ってきた。俺は、決まり文句を言う。

「美味しいよ」

「本当に？」

「本当に」

「そう。よかった」

蘭は安心したように言った。俺も、とりあえずほっとした。夕飯を再び食べ始める。やはり、蘭の料理は美味しい。

おっちゃんの携帯電話が鳴る。おっちゃんはそれに出て、一言一言いうと切る。きっと、麻雀の誘いだろ。

「麻雀。行ってくるから」

「えーちよつと。お父さん！」

「朝までには帰ってくるからな」

おっちゃんはいつの間にかに、食べ終わった食器を台所に置いて、すぐに玄関で靴を履く一瞬のうちにやってしまった。蘭は軽くため息をついて、夕飯を食べ続ける。俺も、食べ続ける。

そして、俺は蘭に不意打ちを仕掛ける。

「さっきのメールは何」

蘭を見るとあまり動揺していないみたいだ。やっぱり、コナン＝新一だとわかっていいのか。

「何って…何のこと。コナン君？」

「とぼけないでよ。蘭姉ちゃん」

「とぼけてないよ」

蘭は素知らぬ顔でいう。こっちからは折れたくない。今まで、隠し続けて今になって言うのも可笑しすぎる。

「だって、僕のケータイに新一ちゃんあてに来たんだよ。僕の正体を知ったって、書いてあったよ！ だから、蘭姉ちゃんが僕の正体…あつ。まさか、わざとやったんじゃないよね？ 僕の正体をわかったから！」

「わざとだったら、コナン君の正体って、誰なの？」

蘭がこの場での外れなことを言った。こっちは、焦っているのに何だ。この余裕の態度は。とにかく、こっちから仕掛けていくしかない。

「えっ。誰って…もう知っているんじゃないの？　蘭姉ちゃん」

蘭はちよつとだけ、驚いた様子を見せた。そして、諦めた様子を見せる。

「…新一なんでしょ？」

やっぱり知っていたか。どういう経緯かは、分からないけど知っていた。だから、あのメールをよこした。

「コナン君の正体は、新一なんでしょ？　答えてよ」

「…ああ」

「やっぱり。そうだったのね」

「…へっ？」

間抜けの声を出した俺に、蘭は箸をがちゃんと音を立てて置くと俺を抱きしめた。俺の体の体温が、二度くらい上昇した。

「コナン君が、新一だったらどんなに嬉しいかずっと考えていた。でも、本当にそうだったんだね」

「……」

「新一…好きだよ。ずっと待ってたよ」

「…ちよつと、話して蘭姉ちゃん。まだ、僕はコナンだよ。コナン。新一兄ちゃんじゃ、じゃないよ」

抱きしめられるを少し抵抗したが、子どもの力では所詮無理だった。蘭に抱かれることを諦めて、この会話をする。

俺は、工藤新一になったら蘭に告白したい。江戸川コナンじゃ無理だ。

「ねえ。新一。ハンバーグ、本当に美味しかったの？」

「本当に美味しかったよ。だから、放して」

「あ……うん」

蘭が放した後、俺はどういう訳か照れ臭くなって夕飯の残りを食べ始める。

「新一、答えて。私のこと、好き？」

「まだ、この姿だから。元の姿に戻ったら教えてあげるよ」

「何よ。偉そうに。子供のくせに」

「中身は、高校生だから」

「それでも、未成年で子どもじゃない！」

「……そうだな。ごめん。今まで、隠して。それには、ちゃんとした理由があるんだ。それと、今までどおりにコナンとして接してくないか？」

俺は、両手を合わせて蘭に頼みこんだ。蘭は、一瞬だけ目を閉じて頷いた。

「わかった。じゃあ、コナン君。ごちそうさまは？」

「頼むから子供扱いは、やめてくれないか。蘭」

「年上の人を呼び捨てにしちゃダメでしょ。コナン君」

「……はい。蘭姉ちゃん」

「よろしい」

子供扱いが余計に酷くなった気がする。もしかしたら、これが今まで騙してたぶんの仕返しかも知れないが。

一応、蘭に言っておこう。

「言っとくけど好きで、騙してきたわけじゃねーから。蘭」

「わかってるわよ。それぐらい。何かしら理由があるのよね？」
「そうだ。今は、まだ言えないけど…」

まだ言えない。FBIが、組織の末端とまだ戦っている。全員逮捕したとジョディ先生は言っていた。だが、全員逮捕していない。そんな感じだった気がする。

「ねえ。新一。電話の時は、どうやってしてきたの？」

蘭が疑問を口にする。普通に思うよな。新一の声をどうやって持ってきたか。

俺は、ポケットから蝶ネクタイ型変声機を取り出して新一しんいちの声のダイヤルを照らし合わせて言う。

「こうやってだよ。蘭」

「新一…」

「今はまだ、話せないけど。戻れないけど…待っててくれないか？」

「うん」

「ごめんな。待たせて」

「いいの！ 新一が、ずっと傍にいたからいいの！」

俺は、蝶ネクタイ型変声機を取って蘭に言う。

「ありがとう。蘭」

「…それより。一緒に、風呂入ったり寝たりしたよね？」

蘭は完璧な満面の笑みを言っている。俺は、まずいと思って蘭との距離を置く。

「混浴の後、鼻血は私の裸を見て興奮したから？」

「ち、違うよ。別に、興奮してない。普通の高校生は…」
「嘘言わないの」

とにかく俺は、蘭から逃げるためにおっちゃんの部屋に入る。鍵
がかけれないのは残念だ。

そのあと、俺がどうなったか蘭だけ知る。

第十五話 電話（前書き）

哀視点です。

第十五話 電話

昨日、工藤君が退院した。今、工藤君と電話している。

『もつと、早く出来ないか？』

「無理よ。もつと、研究設備が整っていたら早くできるけどね」

私は意地悪く言ってみる。工藤君は、昨日蘭さんに正体をばらした。というよりは、ばれていたという方が妥当と思うけど。

『それとさ…目暮警部のこと、どうすればいいのか…悩んでいるんだよ』

「目暮警部のことって？」

『おっちゃん、江戸川コナンの両親を探して欲しいと目暮警部に頼んだんだよ。それでさ、目暮警部が、江戸川コナンには戸籍がないことを知っちゃったんだよ。その場にいた、蘭とおっちゃんは、後で俺の正体を知ったからいいけど。だけどよ…。目暮警部の件は、どうしようかと悩んでいるんだ。俺が、工藤新一かって言うかどうかよ！』

「ふん。それは、難しいわね。目暮警部は、組織関連のことは知らないんですよ？」

『知らないはずだ』

私たちが、戸籍がない理由はすべて、組織にある。

「なら、それはあなたの判断次第。教えるかどうか、自分で決めなさいよ」

『いずれは教えないといけないとは思っているんだ。だけど、その時が来たらお前のことは言ってもいいのか？ 灰原哀は、あの組織

で毒薬を開発していた研究者だったって……」

「それも、あなたの判断次第」

私は素っ気なく突き放す。それはすべて工藤君が決めることだから。

『……わーったよ。すべて自分が決めればいいんだろ？　じゃあな』

工藤君が電話を切った。私は電話を置くと、研究室に戻る。

今はただ、A P T X 4 8 6 9 の解毒剤を作ることに夢中にならないといけない。

そうしないとどうにかなってしまう。

工藤君に振られたことが、私の心の中にすぐ突き刺さっている頭では、結ばれることは無理だっていうことを理解していた。

でも、どこかで工藤君が蘭さんから私の心移りしないかと願っていた。

諦められない。

私の初恋は終わっているのに。最初から終わるのがわかっていたのに。

本当は、工藤君とは何も話したくない。

でも、A P T X 4 8 6 9 という毒薬が私と工藤君のことを離さない。

それがあるから、最低限の会話はしないといけない。

「お姉ちゃん。私は、どうすればいいの？」

返ってくるはずのない言葉を吐いてみる。私は意外に、打たれ弱い。

工藤君が思っている以上、弱い。

志保。自分が思うようにすればいいのよ…

お姉ちゃんの言葉が聞こえて気がした。
幽霊とか信じないけど、お姉ちゃんがここに来てくれたんだ。

私が思うようにすればいい…。
私が思うように？

A P T X 4 8 6 9 の解毒剤を工藤君に渡すことが、私の今の仕事。
それが私がやることだと思っている。
今の私が、思うことはこれだけしかない。

お姉ちゃんがここに来てくれたんだ。
ありがとう。

第十五話 電話（後書き）

乱文×駄文を、読んでくれてありがとうございます。
評価お願いします。

第十六話 親友（前書き）

蘭視点です。

第十六話 親友

コナン君の正体を知ったのは、昨日。新一が言うには、正体を知っているのは博士に哀ちゃん、服部君に新一の両親、お父さんも知っているらしい。それと、園子も知っているらしい。

でも、詳しく話してくれない。どうして、小さくなったのかを…どうして、隠していたのかを。

新一にとって、私はどういう存在だったの？
やっぱり、幼馴染だけという存在だったの？

私は、どうでもいい存在だったの？
何で、話してくれなかったのよ…。

「…あん。蘭。蘭！」

「えっ？」

「どうしたの。蘭。さっきから、ぼーっとして…」

「私、ぼっとしていた？」

「してたよ。心ここにあらずって感じで…」

そういえば、園子と米花デパートに買い物をしていたんだ。私。いつの間にかに、新一のことばかり考えていた。

「ねえ。園子。ちょっと、話したいことがあるんだけど」

「何？」

「レストランで話そう」

「わかった」

園子は、コナン君の正体を知っている。新一は、園子も知っているらしかぬことを言っていた。そのあと、慌てて訂正していたけど。

米花デパートのレストラン街に行く。私は、お手軽に食べれる店に入った。席は、奥の方に座った。

店員が注文を聞きに来たので、私は紅茶を頼んだ。園子も紅茶を頼む。店員が過ぎ去るのを見計らって、話し始める。

「園子…。コナン君の正体、知ってるでしょ？」

「蘭…」

「コナン君が、新一だってこと」

「蘭も、コナン君が新一君だってこと知ってたの？」

「昨日、知った」

「……」

「それで、新一。何か言っただけだった？ 小さくなった理由とか。私に何も話してくれないの！」

「新一君が？」

「そう。何か知ってる？ 園子」

その時、店員が紅茶を持って来たので話を一端切った。園子は、どこか迷った様子で私を見た。店員が立ち去るのを確認すると、園子が口を開いた。

「本当は新一君に口止めされているんだけど…」

園子は、何故新一がコナン君になった経緯を話し始めた。

「…という訳みたいなのよ。最初は驚いたわ。人が小さくなることや、このことを話したら命が狙われるということを」

「そう…」

新一は、私のために何も話せなかった。私、何も知らないで新一を疑っていた。

「蘭」

「何？ 園子」

園子は真面目腐った口調で言ってきた。

「新一君のことがそんなに気になるのなら、今から新一君に会いに行ったら？」

「でも、まだコナン君のままよ」

「良いから…。私は、蘭の親友というよ。そんなに気になるなら、新一君に会いに行くしかないよ！」

「…そうかな？」

「そうだよ」

「園子。ごめん。買い物中断させちゃって！」

「いいよ。別に。さあ、早く行ってきたら」

「ありがとう。園子」

私は、紅茶を飲み鞆から紅茶代を取り出すとこのレストランから出ていく。

新一に確かめないといけない。

色々。元の体に戻るまで待てない。

第十六話 親友（後書き）

駄文×乱文読んでくださってありがとうございます。

金・月と中間テストがあり、中々更新できませんでした。
次回もよろしく願います。

第十七話 判断（前書き）

コナン視点です。

第十七話 判断

灰原に電話した。解毒剤が早く出来ないかと聞くために。それと、蘭にばれたという話を話した。どういう訳か、灰原は機嫌が悪くなった。

「もつと、早く出来ないか？」

『無理よ。もつと、研究設備が整っていたら早くできるけどね』

生憎なことに博士の家の研究設備が限りがある。灰原がいう研究設備が整っているには、ちょっと少ないかも知れない。

「それとさ…目暮警部のこと、どうすればいいのか…悩んでいるんだよ」

『目暮警部のことって？』

「おっちゃんが、江戸川コナンの両親を探して欲しいと目暮警部に頼んだんだよ。それでさ、目暮警部が、江戸川コナンには戸籍がないことを知っちまったんだよ。その場にいた、蘭とおっちゃんは、後で俺の正体を知ったからいいけど。だけどよ…。目暮警部の件は、どうしようかと悩んでいるんだ。俺が、工藤新一かって言うかどうかよ！」

『ふゝん。それは、難しいわね。目暮警部は、組織関連のことは知らないんですよ？』

「知らないはずだ」

まだ組織のことは、FBIしか知らない秘密の情報らしい。しかし、警視庁の上の人にはさりげなく話しているみたいだ。

『なら、それはあなたの判断次第。教えるかどうか、自分で決めな

「さいよ」

「いずれは教えないといけないとは思っているんだ。だけど、その時が来たらお前のことは言ってもいいのか？ 灰原哀は、あの組織で毒薬を開発していた研究者だったって……」

『それも、あなたの判断次第』

灰原に冷たく切り離される。もしかして、灰原。まだ、俺がお前を振ったことを気にしているのか？

しかし、灰原は強そうに見えて弱いところもある。だから、まだ引きずっているんだろう。それで、俺とあまり話したくないから冷たく突き放すのか。

「……わーっ たよ。すべて自分が決めればいいんだろ？ じゃあな」

そう考えると、これ以上話しても無駄だと思い電話を切る。このことは、俺が言ってはいけない。灰原自身が解決しないといけないはずだ。

それにしても、目暮警部の件はどうしようか。まさか、高校生が小学生になるそんな馬鹿話を信じれるはずがない。

だけど、いずれわかると言ってしまった。目暮警部はそれに期待しているはずだ。

話すしかないか。真実を。灰原のことは、伏せて俺がこうなった経緯を話すしかない。

そうとなったら、いつ話すか。それを考えないと。いつ話すかどうか、信じれる話かどうかと判断が変わるはずだ。

「うーん」

そう考え始めた時、蘭の家のドアが開いた。ドアの方向を見るとそこには蘭がいた。

「新…園子からすべて、聞いたわよ」

第十八話 後悔（前書き）

コナン視点です。

第十八話 後悔

「そうか…」

俺は、あつさりと答えた。

園子は、俺が蘭に何も言わないから話したんだと思う。蘭は、昨日から俺のことを考えていたはずだ。多分、どうして話してくれないかと。

「どうして…どうして、話してくれなかったのよ！ 私だって、力になれたかも知れないのに！」

「蘭。お前には、巻き込まれて欲しくなかったんだ」

蘭に巻き込まれて死んでしまっっては、俺は辛い。今まで、ずっと一緒にいたから。

「新一にとって、私って何だったの…？ ただの幼馴染だったの？」

ただの幼馴染という言葉に俺の胸が突き刺さってしまった。何も言えない。

俺と蘭は、ただの幼馴染。それ以上の関係ではない。でも何故か、ただの幼馴染という言葉に胸がチクリと傷んだ。

それでも、蘭を巻き込むわけには行かない。仮に恋人だとしても、絶対巻き込もうとしないだろう。

「それに…新一。私が、トロピカルランドに連れてけなんて、言わなければ良かったんだね。そうすれば、新一。こんなことにならない

「かつたんじゃないの…」

自分を責め始める蘭。俺は、何か言おうとしたが遮られてしまった。

「蘭のせいじゃない。といっても、無駄よ。私が、いけないのよ。トロピカルランドに行こうなんて言わなければ、小さくされなくても済んだもんね。組織の人達からも、命も狙われる必要がなかったもんね」

蘭は、泣き出してしまった。

何も蘭のせいじゃない。俺が、勝手に巻き込まれたんだ。何の力もないくせ、高校生探偵だと騒がれて浮かれた俺が悪くて、蘭がトロピカルランドに連れてけと言ったせいではない。

そう。全て、俺が悪くて、変な好奇心が動いたせいだ。

「うっ。うっ。トロピカルランドに行かなければ、全てに巻き込まれなかったのよね…」

蘭は嗚咽をあげながらも、自分を責めていた。

「何も蘭のせいじゃない。俺のせい。くだらない好奇心が働いて、巻き込まれた。何も、蘭が悪いわけでもないんだ」

「で、でも」

「蘭のせいじゃない。俺がいけない」

「だけど、全ての始まりは私のせいじゃない！ どうして、新一は私を責めないの！」

「…蘭を責めて、俺は戻れるのか？」

「えっ…」

「蘭は、俺に責められることを望んでいるのか？」

俺は、知らず知らずのうちに言葉を発していた。蘭は、俺を呆然と見る。

「違うだろ。本当は。本当は別の言葉を待っているんだろ！」

俺も本当は蘭の別の言葉が欲しかった。後悔の言葉なんて欲しくなかった。

「…そうかもね」

第十八話 後悔（後書き）

乱文×駄文、読んでくださってありがとうございます。

えーそろそろ更新しなければ、いけないと思いながらも中々更新できませんでした。

すみませんでした。

それにしても、話は変わりますが余震怖いですね。

私の街は、震度5強です。

地震で亡くなった方のご冥福を願います。

それと、これ以上大きな揺れは来ないことも願います。

第十九話 告白（前書き）

コナン視点です。

第十九話 告白

蘭は、俺の言葉を肯定すると泣くのをやめた。もう蘭の口から後悔の言葉が、出ることはないと思った。

「新一。ちゃんと、私に話して欲しかった。貴方の口から、全て。もっと早く」

「ごめんな。だけど、蘭。俺にとっては、蘭はただの幼馴染じゃないんだ」

俺は、蘭が言った、ただの幼馴染を否定した。

「じゃあ、新一にとって私は何なの？」

蘭は俺にとって、大切な人だ。蘭なしでは、生きてられない。

「俺にとっては、蘭は…」

心の中では、素直に言えるのに何故か言葉に出すと喉で止まる。蘭は、頬を赤らめる。

「好きな人だ」

「え、今何て…」

「…だから、蘭は俺にとって好きな人なんだ！」

いざハッキリと言うと、恥ずかしい。

「新一。私も、新一は好きな人。ずっと前から、大好きだった人なの」

「ら、蘭…」

「だから、もし戻ったら…恋人になってくれるかな？」

蘭は、恥ずかしそうに言ってきた。俺は、その答えを言う。

「なつてやるよ」

蘭は嬉しそうに、俺に抱きついた。

「よ、よせ。蘭、やめろ」

「だって、嬉しいだもん。今日ぐらい良いでしょ」

「そ、そうだな」

今は、蘭に抱かれる存在なのが悔しいけど。戻ったら、蘭を抱く。思いつき抱きしめる。

「お、おい。お前達」

おっちゃんの声がした。

「…やめろよ」

おっちゃんは、俺を凄いい目で睨みつけどすの利いた言ってきた。
蘭は慌てて離れる。

「お、お父さん帰ってきてたのね。い、今から夕飯の支度するね」

そのあと、おっちゃんに俺と蘭が付き合う事を告げた。反対されたが、何故か蘭の母親・英理があることで来て、俺の正体を告げると素直に賛成した。

つまり、俺と蘭の関係は親公認となった。

第十九話 告白（後書き）

駄文ですみません。

告白…恋愛。

やっぱり、駄目です。

恋愛小説とか、そういうのダメなんです。
ですから、変な告白に…。

すみませんでした。

次回で終わる予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1449o/>

眼鏡の奥の瞳に眠る真実

2011年8月23日20時26分発行